

SGRA REPORT

SGRAレポート No. 114

NO. 114

ISSN 1346-0382

第76回 SGRA フォーラム

中近東・東南アジアからみる日本と 暮らす日本：それぞれの視点で考える



第76回 SGRA フォーラム

中近東・東南アジアからみる 日本と暮らす日本： それぞれの視点で考える

■ 開催の趣旨

中近東や東南アジアでアニメ・マンガなど日本のポップカルチャーへの関心が急上昇している。日本語学習のきっかけとなることも多い。トルコ語に翻訳された日本のアニメや漫画が飛躍的に増えているように、日本ポップカルチャーはブームだ。日本研究においても、これらの地域でなぜ日本文化の受容が広がっているのか、なぜ若者が日本語に特別な関心を持つようになったのかをもっと議論すべきであろう。

一方、日本には中近東や東南アジアの国々から来た多くのイスラム教の移住者がいるが、日本語や文化、教育の環境に順応しようとしながら生活する中で、さまざまな困難に直面している。まずは言語の壁や文化的な違いによる摩擦が大きな課題だ。また、日本で生まれ育った子どもたちにとっては、自らのルーツに基づくアイデンティティーや宗教教育に関する問題も浮上している。

フォーラムでは、こうした課題に焦点を当て、第1部では中近東の日本語教育と日本研究を考える。第2部では、日本文化の受容と日本語教育を内側から議論をするために日本社会と共生する外国人コミュニティ、特に、イスラム文化圏から来た移民が直面する問題を深く掘り下げ、具体的な努力や解決策を模索する場とした。

中近東や東南アジア地域における日本文化の需要を外側と内側からとらえることにより、今日の世界における日本のソフトパワーの位置づけが可能になるだろう。

SGRAとは

関口グローバル研究会（Sekiguchi Global Research Association/SGRA）は、良き地球市民（Global Citizen）の実現に貢献することを目標に2000年に設立されました。渥美国際交流財団の所在地、東京都文京区「関口」に因みます。SGRAは日本の大学院で博士号の取得を目指して研究を行い、渥美奨学生として共に過ごした外国人および日本人の研究者が中心となり、現代の課題に立ち向かうための研究や提言を、フォーラムやレポート等を通じて社会に発信しています。幅広い研究領域を包括した国際的かつ学際的な活動が狙いで、多国籍の研究者が広汎な知恵とネットワークを結集し、多面的なデータを用いて分析・考察を行います。

SGRAかわらばん

SGRA フォーラムなどのお知らせと、世界各地からのSGRA会員のエッセイを、毎週木曜日に電子メールで配信しています。SGRAかわらばんは、どなたにも無料でご購読いただけます。購読ご希望の方は、ホームページから自動登録できます。

https://www.aisf.or.jp/sgra/entry/registration_form/

中近東・東南アジアからみる 日本と暮らす日本： それぞれの視点で考える



日 時	2025年5月2日（金） 10：00～15：00（トルコ時間）、 16：00～21：00（日本時間）
会 場	チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学（COMU） アナファルタル・キャンパス教育学部4階セミナーホールおよびオンライン
言 語	日本語
共同主催	関口グローバル研究会（SGRA）、 チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学（COMU）日本語学科
総合司会	Irmak Kilkesen (COMU)・Arif Çelebi Metin (COMU) ※以下チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学は（COMU）と表記。
開会挨拶	角田英一（渥美国際交流財団） 5 トルガ・オズシェン（COMU） 6 ムザッフェル・オズレミル（COMU） 7

【第 1 部】 中近東の若者にとっての日本語学習と日本文化

【発表 1】	トルコに於ける日本語教育と学習者の最初の混乱：カタカナ レベント・トクソズ（テキルダー・ナムク・ケマル大学（NKU））	8
【発表 2】	トルコの若者のアニメとマンガ関心：現実逃避、別世界とアイデンティティー チェリッキ・メレキ（COMU）	16
【発表 3】	イランの若者と日本語・日本文化：メディア、教育、就職、そして未来展望 アヤット・ホセイニ（テヘラン大学）	25

【討 論】 中近東の日本語・日本文化イメージを再考察する

33

司会：岩田和馬（東京外国語大学）

オンラインQ&A：シェッダーディ アキル（慶應義塾大学）

指定討論者：

孫 建軍（北京大学）

市村美雪（COMU）

ショリナ ダリヤグル（筑波大学）

討論者：

レベント・トクソズ（NKU）

チェリッキ・メレキ（COMU）

アヤット・ホセイニ（テヘラン大学）

【第2部】 日本におけるイスラムコミュニティの日本文化受容と日本語教育

【発表4】 在日の中東出身者における日本語習得過程の変容と
影響要因に関する考察

38

アキバリ・フーリエ（神田外国語大学）

【発表5】 在日インドネシアコミュニティと多文化共生：イスラム教育を中心に
ミヤ・ドゥイ・ロスティカ（大東文化大学）

48

【討論・質疑応答】 日本の国際化の中の外国人コミュニティを再考察する

60

司会：シェッダーディ アキル（慶應義塾大学）

オンラインQ&A：岩田和馬（東京外国語大学）

指定討論者：

ゲンチェル・バルオール・ゼイネップ（パムツカレ大学（PAU））

チャクル・ムラット（関西外国語大学）

討論者：

レベント・トクソズ（NKU）

チェリッキ・メレキ（COMU）

アヤット・ホセイニ（テヘラン大学）

アキバリ・フーリエ（神田外国語大学）

ミヤ・ドゥイ・ロスティカ（大東文化大学）

登壇者略歴 68

あとがきにかえて

チェリッキ・メレキ（COMU） 70

※所属・肩書は本フォーラム開催時のもの。

開
会
挨
拶
1

角田英一 渥美国際交流財団



皆さんこんにちは！ 渥美国際交流財団の角田英一と申します。

今日、地中海文明の悠久の歴史の舞台であるチャナッカレでSGRAフォーラムを開催できることは心からの喜びであります。

今回の中近東で開催する初めてのSGRAフォーラムの実現にあたって共催をお引き受けいただき、実現のために多大なご協力をいただいたチャナッカレ大学学長ジュネイト・エレノール先生、教育学科長ムザッフェル・オズレミル先生、文学部日本語学科トルガ・オズシェン先生に厚く御礼を申し上げます。

渥美国際交流財団は1994年に発足して以来、日本の大学院で博士号の取得を目指す外国人留学生及び日本人学生への奨学支援を行なっておりましました。そして30年間に、その奨学生数は約400名に上り、現在、世界50カ国の大学、研究機関、ビジネスフィールドで活躍しております。

渥美財団が推進する国際学術交流事業は、世界に展開する渥美財団の元奨学生グループのネットワークにより企画、運営されています。このフォーラムも元渥美奨学生である日本語学科のチェリッキ・メレキ先生の企画提案、そして元渥美奨学生で同大学の卒業生のチャクル・ムラット先生のご協力により実現しました。特に、メレキ先生の実行力には敬服するとともに、心より感謝いたします。

今回のフォーラムには、トルコと日本だけでなくイラン、インドネシア、中国、カザフスタン、モロッコから多才な研究者をお招きして、日本研究及び日本語教育をテーマとした講演とディスカッションが行われます。会場でご参加いただく皆さまだけでなく、オンラインでご参加いただく中近東・世界の日本研究者の皆さまと闊達な議論が交わされることを願っております。

そして、このフォーラムから生まれる交流が中近東と東洋の「文明の対話」へと発展し、新しい世界の創造の契機となってゆくことを心より願っております。

開
会
挨拶
2

トルガ・オズシェン

チャナツカレ・オンセキズ・マルト大学 (COMU)



おはようございます。渥美国際交流財団のみなさま、関口グローバル研究会 (SGRA) のみなさま、オンラインでご参加のみなさま、そして学生のみなさん、本日はお忙しいなかお越しいただき、ありがとうございました。

我々も渥美財団のみなさんとの交流は初めてなのですが、やはり中東そして東南アジアにおける日本研究・日本語研究はこれからもますます進化し、発展していくと考えております。この機会是我々にとっても有意義なものであり、皆さんとネットワークを拡大し、オンラインの方々とも意見交換できることを非常にうれしく思っています。

挨拶が長くなると時間的に限界が出てくるので、ここで挨拶を終わらせていただきたいと思います。皆さん本当にありがとうございました。よろしくお願いいたします。

開
会
挨
拶
3

ムザッフェル・オズレミル

チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学（COMU）



[原文は英語、翻訳：川崎理恵]

チャナッカレへようこそ。チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学教育学部学部長のムザッフェル・オズレミルと申します。本日、私たちがここに集まるきっかけとなった日本語で、まず一言ご挨拶できることを大変光栄に思います。チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学では、日本語教育学科が長年にわたり、トルコと日本の間の学術的・文化的な交流を育んでまいりました。本日のフォーラムは、その取り組みの成果を示すものです。

このたび、第76回SGRAフォーラムを、本学日本語教育学科と渥美国際交流財団との共催により開催できますこと、心より嬉しく思います。まずは、このイベントの実現に多大なご支援を賜りました今西様、角田様、そしてソイヤ様に、厚く御礼申し上げます。

本日は、日本、トルコ、イラン、インドネシア、モロッコ、中国、カザフスタンからの参加者をお迎えしております。このような日本研究への情熱を共有する多様なコミュニティが一堂に会したことは、実に感動的です。本日の議論と交流が、より深い協力関係を育み、トルコおよび地域全体における日本学研究の新たな道を切り開く転機となることを、切に願います。

また、渥美国際交流財団ならびに関口グローバル研究会の皆様のご尽力に、そして本日の充実したプログラムを丹念に準備してくださった本学日本語教育学科の皆様にも、深く感謝申し上げます。

本日の議論が、学術的な絆を強めるだけでなく、私たちの国々の友情をさらに深めるものとなりますように。皆様には、ここチャナッカレの美しい景観、歴史の重み、そして活気あふれる文化も併せてお楽しみいただければ幸いです。

【第1部】

中近東の
若者にとっての
日本語学習と
日本文化

発表 1



トルコに於ける日本語教育と 学習者の最初の混乱： カタカナ

レベント・トクソズ

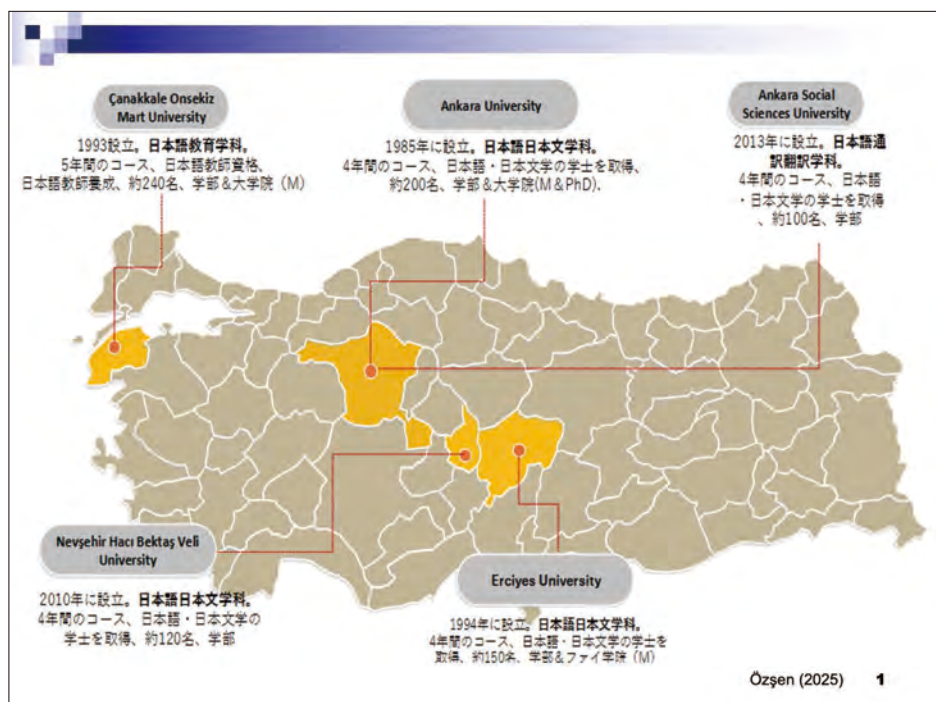
テキルダール・ナムク・ケマル大学 (NKU)

本日の私の発表は、まずトルコにおける日本語教育について簡単に説明します。そして、トルコ人大学生のカタカナに対する違和感の話題に移る前に、そもそも若者は日本人に対してどういうイメージを持ってるのか、外来語という言葉要素にどのようなスタンスでいるのかをお話します。それらを踏まえて、カタカナに対する違和感について考察していきたいと思います。

1. トルコにおける日本語教育とトルコ人の 若者が抱いている日本のイメージ

トルコでは、スライド1に示したように、いくつかの大学で日本語教育が行われています。

最初に設立されたのは1985年のアンカラ大学（Ankara University）日本語日



スライド 1

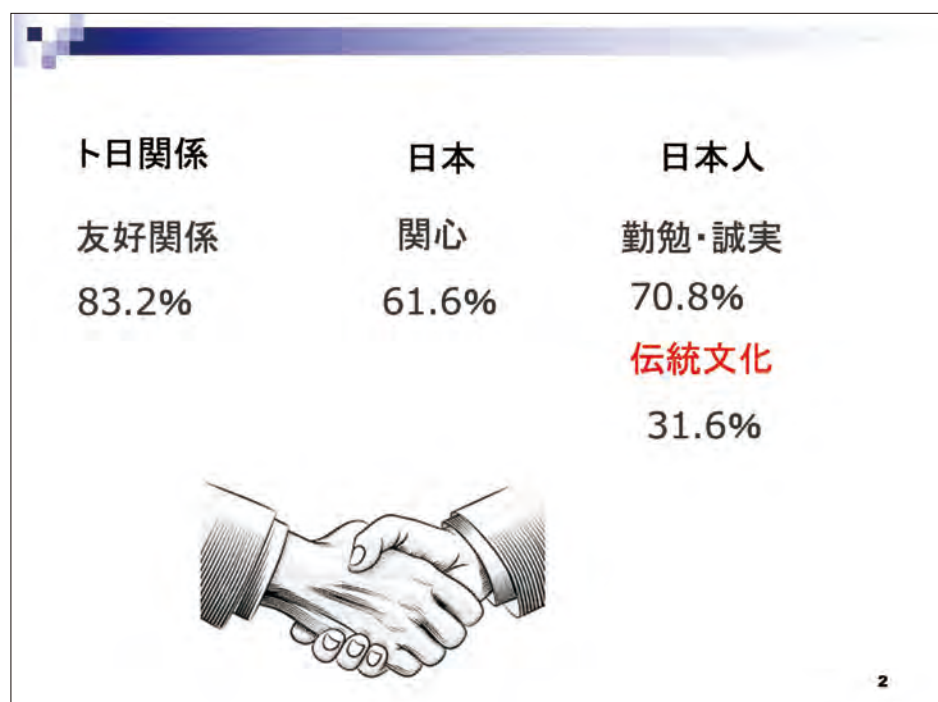
本文学科です。その次にここチャナッカレ・オンセキズ・マルト大学（Çanakkale Onsekiz Mart University）に日本語教育学科が設立されました。設立年は1993年です。そしてこの大学だけが5年間のコースで、最初の1年間は予備クラスになっています。その次がエルジヤス大学（Erciyes University）で、1994年に日本語日本文学科が設立されました。4番目がネヴシェヒル・ハジ・ベクタシュ・ヴェリ大学（Nevsehir Hacı Bektaş Veli University）で、2010年に日本語日本文学科が設立されています。最後のアンカラ社会科学大学（Ankara Social Sciences University）では、2013年に日本語通訳翻訳学科が設立されました。

そして、これらの大学の教員と講師も含めて、アカデミック・スタッフの数を見てみると、最も多いのはアンカラ大学の10名です。そのうち教授が3名います。その次が、アンカラ社会科学大学とエルジヤス大学で、アカデミック・スタッフが9名います。エルジヤス大学には教授が1名います。ネヴシェヒル・ハジ・ベクタシュ・ヴェリ大学はアカデミック・スタッフが7名いて教授はいません。2023年現在の卒業生数を見てみると、最も多かったのはやはりチャナッカレ・オンセキズ・マルト大学で29名。その次はアンカラ大学とエルジヤス大学が21名で並んでいます。アンカラ社会科学大学はまだ卒業生を送り出していません。ネヴシェヒル・ハジ・ベクタシュ・ヴェリ大学では14名が卒業しました。

どの大学も初年度には日本語教育に重点を置いていると思いますが、学習過程でトルコ人大学生が最初に直面する課題がおそらくカタカナです。

では、これからトルコ人大学生のカタカナに関する反応に移りますが、まずその前に、トルコ人の若者が日本に対してどういうイメージを持っているのか、そして外来語という要素にどのようなスタンスを見せているのかを説明します。

まず、日本に対するイメージですが、スライド2は日本の外務省が2012年5月にトルコの民間調査会社に委託して行った「トルコにおける対日世論調査」か



らの引用です。この調査結果は外務省のホームページにも掲載されています。トルコの主要10都市を対象に、人口比に応じて18歳から65歳までの1,012名を対面式で調査したものです。

結果を見てみると、トルコと日本との関係について友好関係と答えている人は83.2パーセント、日本に「関心」を持っている人は61.6パーセントです。また、日本人に対して「勤勉・誠実」と答える人が70.8パーセントで、日本人は「伝統文化」を重視してそれを維持していると答えている人は31.6パーセントです。

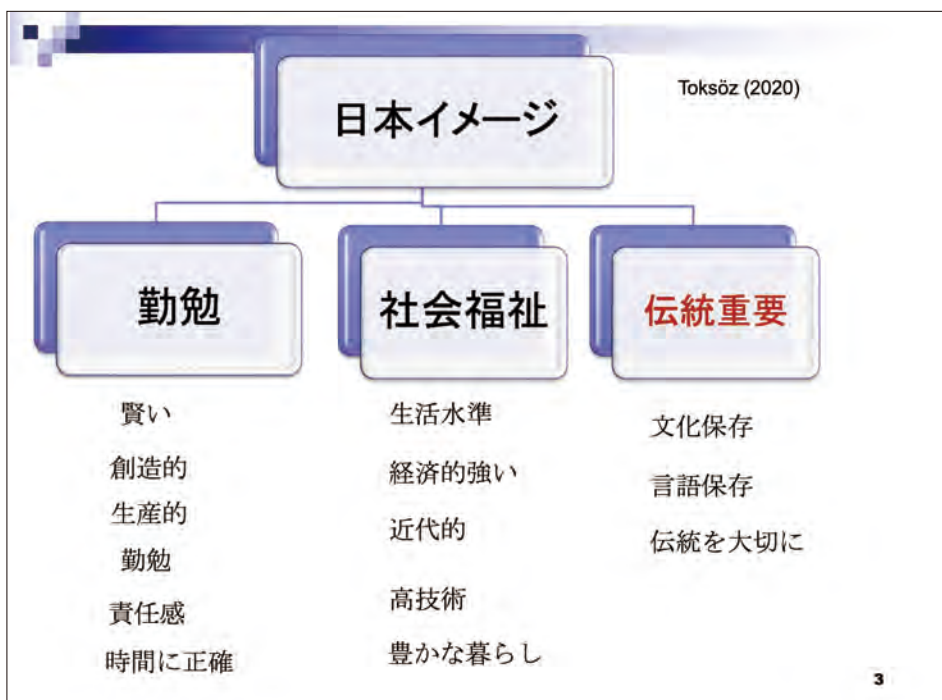
もちろん、日本の外務省の調査以外にもトルコではいろいろな先行研究が行われています。大きくみると調査目的は二つに分けられます。

一つは「消費者として」、消費者の目線で日本の製品や日本国にどういうイメージがあるかを扱っている研究、もう一つは「個人として」、一般的に日本や日本人を扱っている研究で、この二つの目的で先行研究が行われていると言えます。

まず一つ目の「消費者として」ですが、日本製の製品は「デザイン」がコンパクトで、「信頼性」がある、「仕上がり」が良い、「壊れにくい」と答えている人がいます。そして、日本に対しては「生活水準」が高い、「テクノロジー」が進んでいる、また「友好国」だと回答している方もかなりいることが分かります。

次に「個人として」ですが、これは普通の若者が「日本」もしくは「日本人」に対してどういうイメージを持っているのかを探っている研究もあります。おそらくこれはソフトパワーとも関連していますが、「日本」というと「アニメ」と「マンガ」というキーワードがよく出てきます。また、「テクノロジーが進んでいる」という回答もよく出てきます。「日本人」に関しては、やはり「勤勉で真面目」、「時間に正確」、そして「伝統を重視」しているという回答がよく出てきます。

それでは次に、これ私が行った調査結果ですが、一般的に日本のイメージはどのような要因から成り立っているのかを探りました（スライド3）。



スライド3

この調査では日本語が全くわからない140名の若者を対象としましたが、その時もやはり三つの要因が抽出されました。

一つ目は、日本人は賢い、そして創造的、また生産的、勤勉で責任感がある、時間に正確というイメージで、ここから私は「勤勉」というキーワードを抽出しました。

その次は、「社会福祉」と関連したイメージです。生活水準が高い、経済的に強い、近代的、また技術が進んでいる、そして豊かな暮らしという回答が出てきました。

最後は、日本人が「伝統を重要」としているという回答がやはりここでも出てきました。日本人は自分の文化、そして言語を維持している、伝統を大切にしているというイメージが私の調査でも見られました。

では、ここまで日本人に対するトルコ人のイメージについて述べましたが、ここからはトルコ語の外来語についてトルコの若者がどう思っているのかについて説明します。

まず外来語の定義ですが、「我々が外来のものとして日常的に意識する、あるいは意識できる欧米諸国から入ってきた語」を意味しています。もちろん外来語に対するものとして本来語がありますが、本来語は日常的に古くから使っている言葉、外来のものとは意識していない語を意味します。

トルコ語の外来語を見てみると、スライド4をご覧ください。左列がトルコ語の外来語、右側がトルコ語の本来語です。（英語と日本語の関係で読み替えると）リアクションと反応、プレゼンテーションと発表、コンセンサスと合意、ポジションと立場、アクティブと積極的、ペシミストと悲観的、プロセスと過程、アナライズと分析、ダイレクトと直接といったように、外来語と本来語が共存している、つまり共に生きているケースがかなりあります。

b. 外来語イメージ	
reaksiyon	/ tepki
prezantasyon	/ sunum
konsensüs	/ uzlaş
pozisyon	/ konum
aktif	/ etkin
pesimist	/ kötümser
proses	/ süreç
analiz	/ çözümleme
direkt	/ dosdoğru

スライド4

では、普通の若者がトルコ語の外来語に対してどのようなイメージを持っているのか。それを探ってみると、1993年の研究（König.Somuncu 1993）でも、1997年の研究（Osam 1997）でも、そして私の行った2020年の調査（Toksöz 2020）でも同じ結果になっていました。外来語を支持してない人の方が圧倒的に多いのです。要するに、外来語の造語に危機感を感じ、外来語はあまり好ましくないと考えている若者が多いのです。「母語への外来語の流入を好ましく思っておらず、その必要性もあまり感じていない傾向」があることがよくわかりました。その理由の多くは、外来語というものが「伝統を破壊」しているというものです。伝統的価値から乖離している、母語の伝統を破壊している、あるいは外来語をむやみに使っている人は自分に自信が持てない人だという回答もよく出てきました。

一方、もちろん外来語には「格好良さ」とか「語彙力」とか、そういう側面もあります。例えば、外来語を使うことによって、知的な感じを与える、新しさを与える、高級感、モダンな感じを与えるということもあります。また、外来語によって話が通じやすくなる、トルコ語が豊富になるという側面もあります。

普段はこの「格好良さ」とか「語彙力」を感じる人が、もちろん外来語を支持している、外来語が好きな人とも言えますが、やっぱり伝統を破壊しているというその重みが非常に顕著です。

とはいうものの、実は意識と現実が合っていないケースも考えられます。例えば、私が「赤信号で渡りますか」と直接聞けば、多分ほとんどの人が「いいえ、渡りません」と言います。でも、実際に観察してみると、赤信号でも渡っている人はいます。この調査では、そもそも外来語が好きだというグループだけに調査を行い、たくさんの外来語を見せました。それでわかったことは、彼らが格好良さとか語彙力があると感じているのは、自分が使っている語だけです（スライド5）。使用率が高い語、例えばモチベーションとかグローバル、ディフェンス、



スライド5

イゾレーション、エリートのような使用率が極めて高い外来語には格好良さを感じているのですが、例えばデータとかアナリストとか、コンセンサス、プロセス、プレゼンテーションといった使用率が低い語になると、外来語が好きな人でさえ支持していません。これらの外来語を使う人は格好をつけている、気取っているという回答がよく出てきます。

以上をまとめますと、まずトルコ人の若者は、日本に対して伝統的というイメージを持っていて、また外来語に対しては伝統を破壊しているというイメージを持っています。

2. トルコ人大学生のカタカナ違和感

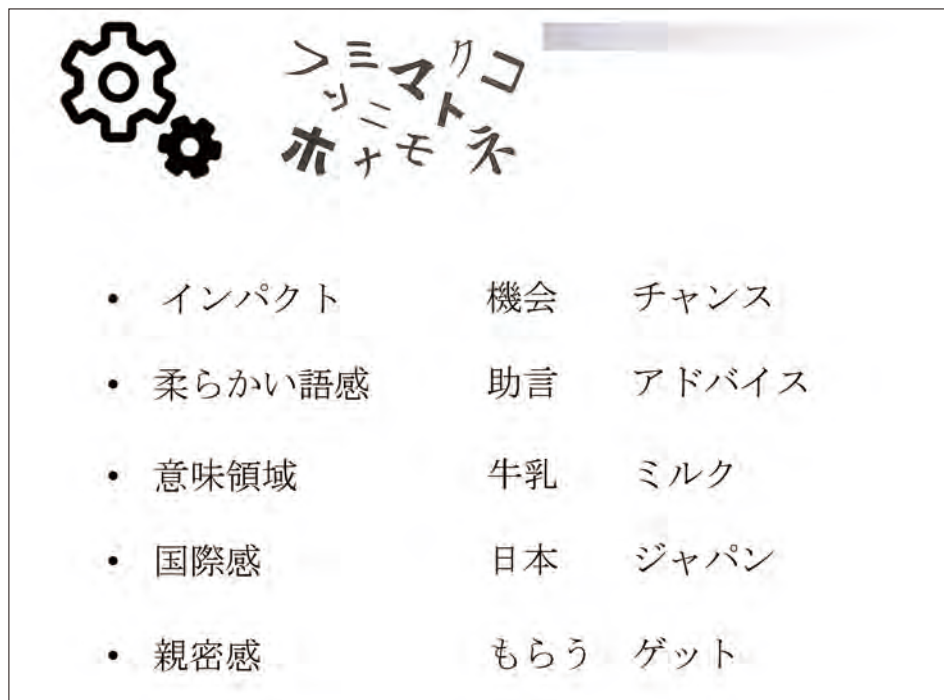
それではこれからトルコ人大学生のカタカナに対する違和感の話題に移ります。私はケマル大学で日本語を選択科目として教えています。1年生で私の授業をとる学生は4年間続けて私から学ぶわけです。私は『まるごと』という教科書を教材として使っていて、最初の5～6週間、第1課はひらがなを習得させています。次の第2課になると、今度はカタカナになりますが、テレビとかカメラなどはトルコ語でも外来語としてあるのでそれほど違和感はないのですが、普通の学生は、テーブルあるいはベッドとかジュースとかになると、一様に驚きを見せます。

なぜつくえではなくテーブルなのか、なぜジュースという外来語が日本語にあるのかと、私の生徒たちは不思議に思っているわけです。

3年生のクラスでは私はJポップの歌詞をトルコ語に翻訳する授業を行っていますが、ウルフルズの歌詞で「君を 好きで よかった このまま ずっとずっと 死ぬまでハッピー」というフレーズが出てきたときは、どうしてハッピーなのか。どうして幸せとか幸福ではなくてハッピーなのか、彼らは疑問に思っています。おそらく日本人は欧米に憧れがあると解釈している学生もいるかもしれません。

その理由は何でしょうか。私はおそらく日本語における外来語の機能とトルコ語における外来語の機能が違うからではないかと思います。例えば日本語の場合、相手に印象づけたいとき、インパクトを与える表現が使いたいときに、わざと外来語を使うことがあります（スライド6）。例えば、「機会」ではなくて「チャンス」を使うといった具合です。あるいは、柔らかい語感を与えたいときは、「助言」ではあまりにも直接的になりすぎるので、「アドバイス」を使用しようとするのかもしれませんが。「牛乳」と「ミルク」のように、意味領域がはっきり決まっているケースもあります。どんなときに「部屋」を使うのか、どんなときに「ルーム」を使うのかは多分決まっているわけです。

おそらくトルコ人の大学生が特に気になるのは、「牛乳」という言葉があるのに、どうして「ミルク」という外来語が日本語に存在しているのかが多分わかりづらいのだらうと私は思っています。日本語の場合、外来語を使うことによって国際感を与えることもあります。例えば「日本」のことを「ジャパン」、あるいは



スライド6

「〇〇ジャパン」と表現しているときは、国際感を意識しているわけです。そういった感覚もトルコ人には分かりにくいのかもしれません。「トルコ」のことをわざわざ「ターキー」という言葉で表現したら、多分気取っているとトルコでは解釈されると思います。

また、外来語の親密感という機能もトルコ語にはないと私は考えています。例えば「もらう」と「ゲット」するを見てみると、「ゲット」を使った時点で相手との距離感はもう縮んでいます。こういった親密感を与えることが特に日本語の場合はできますが、トルコ語の場合は外来語にこういう機能はありません。

そこで、カタカナを学ぶとき、トルコ人大学生が一瞬の驚きを見せているわけです。その理由としては、「外来語が伝統を破壊している、母語を破壊している」という考え方がその他のベースにあって、日本語における外来語の機能について彼らはまだはっきり把握してないという部分もあるかもしれません。

私の発表は以上です。文献はご覧の通りです（スライド7）。ご清聴ありがとうございました。

参考文献

- Kahraman, C. (2017). Asya'nın iki ucundan görüşler: Türkiye-Japonya algısı. *Pamukkale Üniversitesi Sosyal Bilimler Enstitüsü Dergisi*, 28, 73-86.
- Kahraman, C. (2014). Türk üniversite öğrencilerinin Japonca kavramına ilişkin algılarının metaforlar yardımıyla analizi: Namık Kemal Üniversitesi örneği. *Atatürk Üniversitesi Sosyal Bilimler Enstitüsü Dergisi*, 18(2), 95-110.
- König, Gülay & İnci, Somuncu (1993) Üniversite Öğrencilerinin Anadillerine ve Yabancı Dillere İlişkin Tutumları Üzerine Toplum Bilimsel bir Araştırma. Ankara: Ankara Üniversitesi Dil ve Tarih Coğrafya Fakültesi Yayınları, 371, 11-42.
- Kurtuluş, K., & Bozday, Z. (2011). Ülke imajı: Japonya ve Çin'in ülke imajları açısından karşılaştırılması. *Istanbul University Journal of the School of Business Administration*, 40(2), 267-277.
- Kurtuluş, S. D. (2008). Ülkelerin marka kişiliği üzerine bir araştırma. *Atatürk Üniversitesi İktisadi ve İdari Bilimler*, 22(2), 285-300.
- 日本外務省 (2012). トルコにおける対日世論調査 (結果概要) https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/release/24/5/0522_01.html
- Şentürk, T., & Kartal, B. (2018). Tutum teorisi açısından ülke imajı, ürün imajı ve tüketici satın alma niyeti. *Yönetim ve ekonomi: Celal Bayar Üniversitesi İktisadi ve İdari Bilimler Fakültesi Dergisi*, 25(3), 1033-1050.
- Osam, Necdet (1997) The Attitude of Turkish People Towards the Use of Foreign Words in a Turkish Context (Doctoral dissertation). Hacettepe University, Institute of Social Science, Turkey.
- Özdemirci, A., & Önder, H. B. (2018). Uluslararası halkla ilişkiler yoluyla ülke algısı ve imajı oluşturmak: Almanya'da Türkiye algısı ve imajı üzerine ampirik bir araştırma (2010-2013). *Ankara Avrupa Çalışmaları Dergisi*, 17(1), 61-98.
- Özenç, H. (2002). Türkiye'nin imaj sorunu ve ihracat. *Kalder Forum*, 2(8), 38-44.
- Özşen, T. (2025). トルコに於ける日本語教師養成モデルチャナツカレ・オンセキズ・マルト大学日本語教育学科の事例を通して
- Özşen, T. (2016). İkinci yabancı dil olarak Japonca öğrenenlerin gözüyle "Japonya" imgesine bakış. A.Özbek, T.Özşen, K.Kawamoto (Ed.) *Japon Dili ve Kültürü Eğitimi Araştırmalarına Yeni Yaklaşımlar* Çanakkale: Paradigma Akademi.
- Özşen, T. (2014). Lisans düzeyindeki Japon dili öğrencilerinin Japon toplumu ve diline ilişkin tutumları üzerinden değerlendirilmesi. *International Journal of Social Science*, 28, 293-314.
- Varoğlu, G. (2016). Japon dili ve edebiyatı lisans öğrencilerinin "Japonca" kavramına ilişkin algıları. A.Özbek, T.Özşen, K.Kawamoto (Ed.) *Japon Dili ve Kültürü Eğitimi Araştırmalarına Yeni Yaklaşımlar* (63-78). Çanakkale: Paradigma Akademi.
- Toksöz, L. (2020). *BATI KAYNAKLI KELİME ALGISI (Dost musun Düşman mı?): Türk ve Japon Öğrenciler Üzerine Bir Araştırma*. YALIN YAYINCILIK.
- Toksöz, L. (2020). Japonya imajını oluşturan faktörler üzerine bir inceleme: Namık Kemal Üniversitesi örneği üzerine. 7. *Uluslararası Bilimsel Araştırmalar Kongresi Bildiri Tam Metin Kitabı*, 255-268.

スライド 7

【第1部】

発表 2



トルコの若者のアニメとマンガ関心： 現実逃避、別世界とアイデンティティー

チェリッキ・メレキ

チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学 (COMU)

私の発表は、トルコの若者がアニメとマンガにどういう関心を持っているかについてです。レベント先生の発表ではトルコ人とカタカナの話が出てきましたが、トルコの若者が日本の伝統または精神文化にとっても関心を持っているという点で、私の発表ともつながります。さらに、現実逃避と別世界（もしくは異世界）とアイデンティティーの関係についてもお話しします。

発表の流れは、はじめにトルコにおけるアニメ・マンガ事情の一部を紹介し、その特徴や意味合いに触れ、次にトルコの若者育成政策とアニメ・マンガの異世界との関係、さらに理想郷／ユートピアとして日本のアニメやマンガがどう機能しているのかを考えます。最後に、インドネシアとトルコのアニメ・マンガ事情の共通点としてファン・グループにも触れてまとめます。

以下のキーワードを視野に入れ、トルコの若者が日本のアニメとマンガをどう見ているのか、我々はそこから何を考えることができるかということを考察していきたいと思います。

- ・文化産業 (culture industry)、グローバル化 (globalization)、ポップカルチャー (pop culture)
- ・サブカルチャー (sub culture)、ファンカルチャー (fan culture)
- ・アジア娯楽産業 (Asian Style Amusement ; Hallyu, and Japanese Style)
- ・現実逃避 (Escapism)、異世界 (isekai)、アイデンティティー (identity)

1. トルコにおけるアニメ・マンガ事情の歴史、特徴と意味合い

まず、文化の定義ですが、文化とは「特定の社会や社会集団を特徴づける生活様式であり、その内容は知識、伝統、規範、法律、信念から成ります (Giddens & Sutton, 2014, s.259)」と定義されています。サブカルチャーも、その国またはグループのメイン文化の中の一つ、断面写真 (kesit) として考えられます。

文化には色々ありますが、物質文化と精神文化ということが最近論じられてい

ます。「精神文化とは、ある国家を他の国家と区別する文化の範囲（習慣、伝統、社会的行動）などであり、その国家の個性を際立たせるものである」（Kocadas, 2005, p. 3）といわれるもので、支配的な規則とは異なり、より明確な反応を示す行動として「国民文化のサブプラクティス」（Boschele, 2015, p. 2）として定義されています。

物質文化と精神文化という観点から見ると、トルコの若者はアニメとマンガをまず日本の精神文化として受け入れています。そして少数派ではありますが、例えばフィギュアとかコスプレとかそういったものも最近出てきて、一方では物質的な文化も受け入れるようになったと考えられます。

ポップカルチャーは、『popular』の最も短く平凡な意味は『人民に属する』であるが、この概念はこの定義よりも広い範囲を表現とする。したがって、大衆文化とは、日常生活と工業製品のユーザーとの間の『中間層』によって作り出された文化世界である（Hatipler, 2017, p. 41）」と定義されます。その中でごく人気がある何か、例えば「ワンピース」などですが、それは一方では資本主義のもとで売れるものでもあります。ですから、ポップカルチャーと資本主義（capitalism）は深層において繋がっているといえます。

テオドル・アドルノ（Theodor W Adorno）というドイツの哲学者の、文化産業（Culture Industry）という理論があります（スライド1）。つまり、文化を「売る」ことができるのです。

トルコの文化を例に挙げると、「ナザール・ボンジュウ」という目玉の形をした魔除けのお守りが商品になるわけです。トルココーヒーももちろん売れるのですが、文化も売れるのです。だから、文化というのは一つの産業といえるのではないかとアドルノ氏は言っています。

最近、世界の中で、日本のアニメ・マンガが一つの日本の精神文化として産業化されているという論があります。トルコの場合、トルコの事情に関する意義として、トルコでは商品のみではないです。なぜかという、若者が自ら翻訳してホームページを作っている、つまり作るプロセスの中に入っているからです。ただ単に「買って消費するもの」ではありません。

Theodor W Adorno: Culture Industry

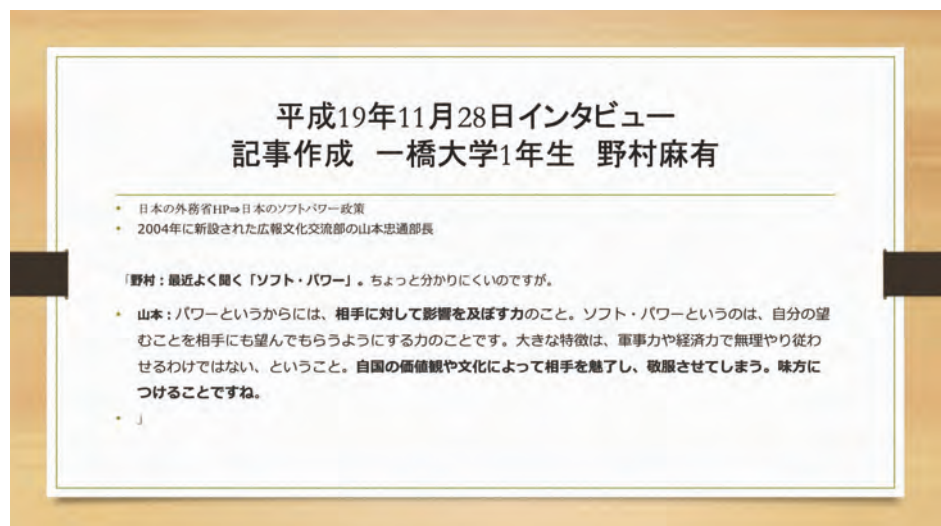
- 「物質文化」と「精神文化」の両方がアドルノの「文化産業」の論点からすると「商品化」できる。
- ⇒文化産業⇒文化の商品化⇒文化を「売る」こと
- Culture は Industry でありえる
- ⇒日本のアニメ・マンガと言うメディアの日本の精神文化の産業化といえるのではないか

スライド1

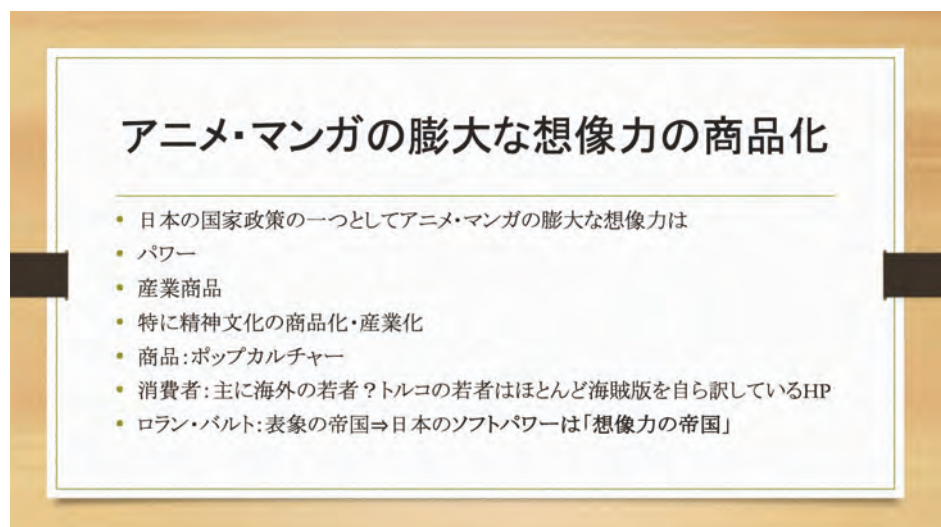
一方、日本側からすると何があるかという、先ほどレベント先生も少しソフトパワーについて触れておられましたが、ソフトパワーというのは、自分の望むことをどこか別の国とか場所に受け入れてもらったりすること。つまり、自分の価値観や文化を相手に示して、魅力的だなと思ってもらったりすることです。それには国の政策も関係します。簡単に言うとそんなことですが、日本の外務省のホームページにわかりやすく説明されていたので、スライド2に抜粋しました。大学生の方が日本のソフトパワーについて外務省の方にインタビューしたときの話です。

マンガとアニメの何がそんなに受けているのか、何がいいのかというと、私の結論では、想像力の商品化です（スライド3）。想像力がマンガとアニメを魅力的なものに見せています。もちろん、商品化されるマンガとアニメは日本の国家政策でもありますし、パワーでもあります。産業としての商品でもあります。

特に文化の商品化です。その場合、ポップカルチャーはやはり先ほどのアドルノ氏の論で言う消費される商品で、消費者はおそらく海外と日本の若者の両方です。



スライド2



スライド3

そこで1990年代にフランスの哲学者ロラン・バルトは、日本を「表象の帝国」と表現しました。日本は表象のシンボルだったのです。でも、2025年現在、トルコの事情を見て、私はそれを「想像力の帝国」と言い換えた方がいいと考えています。これは我ながら一つの提案となるのではないかと考えています。

なぜかという、次に詳しく見ていきますが、描くことによって表現されるマンガとアニメは、すごい想像力の表れだといえるからです。

2. トルコの若者育成政策 VS アニメ・マンガの異世界

一方で文化論からみると、「大衆文化において考慮すべき最も重要な特徴は、それが覇権的イデオロギーの要素と、「苦しむ」人類の解放への期待を表す「反イデオロギー的」要素の両方を含んでいることである（Oskay, 1980, p.250）」だとされます。もっとかみ砕いていうと、苦しみを持つ人たちが、一つのレジスタンス（抵抗）として何かのポップカルチャーにハマる、そういう文化が大好きになるといいます。つまり、他の国のポップカルチャーを受け入れる時は、一つは苦しみとか困難な環境、もう一つはイデオロギーとかに抵抗したい気持ちがあるそうです。そういう議論があります。

では、「トルコの若者はそんなに苦しんで」いるのでしょうか。いろいろ考えられますが、抵抗とかイデオロギーに反発するという意味でしたら、2010年代以降のトルコの若者を見た方がいいかもしれません。2010年頃には、少し保守的な若者、いうことをちゃんと聞く若者、言い換えると少しおとなしすぎる若者を作る政策があるんです（スライド4）。それを日本語で「望ましい若者」と訳しました。

同時に、2010年代にマンガ・アニメにバンバンはまっていく若者のグループも現れます。その二つがなぜ一緒になったのかは、少しクエスションマークなので一緒に考えましょう。

抵抗(resistance) 「反イデオロギー的」(anti ideology)

- トルコ共和国:「2010年代は、この記事の枠組み内で行われた調査で何度も遭遇する期間の始まりです。あらゆる新政権が採用するイデオロギー、特に教育分野を通じて社会学と覇権を築こうとする取り組みは、トルコにとって慣れ親しんだ日常業務となっている。この文脈において、2010年代は文化権力(覇権)をめぐる闘争が名指された時代である。この闘争の範囲内で、誰もが知っている「望ましい若者」の特定のプロフィールが、政治権力によって頻繁に描写されてきました。(Şaşkın, 2022)
- ⇒2010年代にトルコ政府の「望ましい若者」政策VS「望ましくない」豊かな想像力→一つの抵抗と反イデオロギー的な範疇の一つとして日本のポップカルチャー
- 2024年のトルコの海外移住は2023年に比べて50%増加
- 若者の海外移住思考

スライド4

海外移住思考、海外に住みたい若者は私の学生の中にもいます。それも 2024 年は前年 2023 年に比べて 50 パーセント増と、急に増えました。もしかするとトルコの若者は別の世界、異世界としてマンガ・アニメを見てるのではないかと考えられます。

簡単にトルコとトルコのマンガ・アニメの歴史を見ますと、先ほどレベント先生が説明してくださったようにトルコでは 90 年代に入って日本語学科が作られたり、日本語が勉強されるようになったりしましたし、マンガ・アニメとか日本の時代劇とかも放送されるようになりました。

トルコ文学における新たな研究テーマとみなされている K ドラマや K ポップ、そして 1990 年代から話題になり始めたマンガ・アニメ (Alicenap, 2014, p33) は、音楽から食文化、映画から美の認識まで多くの分野に影響を与える大衆文化となり、私たちの生活の中で私たちと共にあり続け、社会現象に影響を及ぼし始めています。1990 年代はトルコの日本研究とアニメ・マンガとの出会いの第一歩といえます。その影響要素の一つは、インターネットとグローバル化です。ただ、トルコのインターネット事業は 2000 年以降に普及するので、90 年代ではまだインターネットの話もできません。

アジア文化は 2010 年年代からトルコだけではなく、世界的に有名になりました。日本のマンガやアニメは、テレビで放映されたり、マンガやアニメのファン、特にインターネットユーザーによって公開されたウェブサイトで紹介されたりするようになり、1990 年代からますます人気が高まっています。若者たちが興味を持っているからアニメをサポートしましょうとか、マンガだけ出しましょうといった出版社が現れ、日本分野専門の出版社ができたというのも大きいです。現在、トルコには「Arunus, Tudem, Everes, İthaki, Gerekli Şeyler, Marmara, Çizgi ve Akılçelen」など、さまざまな出版社がマンガを出版しています。最近、例えば İthaki は日本のクラシックマンガを 80 冊一気に出しました。本日のご参加の先生方の中にも、この翻訳に携わった先生がいらっしゃいます。

トルコでは先にアニメが知られるようになって、マンガは少し後から入ってきました。最初はずっとテレビを媒介にしていました。

人気順
アニメ

Çizelge 2.9. En çok sevilen anime

	Frekans	Yüzde	Geçerli yüzde	Biriktirilmiş Yüzde
Dijer	343	33,8	33,8	33,8
Naruto	130	12,8	12,8	46,6
One Piece	120	11,8	11,8	58,4
Gintama	58	5,7	5,7	64,1
Fullmetal Alchemist	55	5,4	5,4	69,6
Death Note	40	3,9	3,9	73,5
Bleach	35	3,4	3,4	76,9
Steins;Gate	34	3,3	3,3	80,3
Code Geass	33	3,3	3,3	83,5
Shingeki no Kyojin	31	3,1	3,1	86,6
Hunter X Hunter	29	2,9	2,9	89,5
Attack on Titan	15	1,5	1,5	90,9
Shigatsu wa Kimi no Uso	15	1,5	1,5	92,4
Sword Art Online	15	1,5	1,5	93,9
Haikyuu	13	1,3	1,3	95,2
Noragami	13	1,3	1,3	96,5
Dragon Ball	12	1,2	1,2	97,6
Fairy Tail	12	1,2	1,2	98,8
Tokyo Ghoul	12	1,2	1,2	100,0
Toplam	1015	100,0	100,0	

スライド 5

トルコのマンガの定義も面白かったです。「マンガの後に続き、視覚言語の延長であり、マンガのデジタル記号でもある「アニメ」も、もともとマンガがベースになっています。しかし一方で、マンガの重要性と人々によるマンガの認識はアニメを通じて達成される」(Ozdemir, 2020, s19) ということです。アニメはマンガのデジタル記号としての位置付けで、マンガとアニメはとても近いものです。でも、日本人にマンガとアニメとどちらが好きですかと言ったら、はっきりしたイメージがあると思います。出版された紙の印刷物がマンガで、映像で見るのはアニメですから、同じではありません。でも、マンガからアニメができたり、アニメからマンガになったりもします。日本文化のその二つのジャンルは一つのものとして見られています。日本、中国、韓国が同じ世界だと見られているケースもありますが、それはまた別の機会でお話しします。

それでは、人気のあるマンガを少し見ていきましょう。トルコではマンガよりアニメ、読書よりも視覚的メディアへの関心が高く、その芸術性も視覚性も重視されています。おそらくトルコは「読む文化」よりも「話す文化」なのかもしれません。そして、私からみると日本は「話す文化」よりも「書く文化」です。文字も書く、絵も描く。そういった習慣がすごく普及しているからです。

人気アニメについては、皆さんの方が詳しいと思います（スライド5）。どこに行っても『Naruto（ナルト）』が第一。ほかにも『One Piece（ワンピース）』など、たくさんあります。この中にはトルコ語に翻訳されたものも多いです。

アニメ、マンガをどこで見ているのかというと、昨年 1000 人ぐらいの人に聞いた調査結果を見るとインターネット視聴が一番でした。ほとんどの人がオンラインのインターネットサイトでアニメを見ている。マンガを訳すサイトもあります。

マンガの人気順位を見ていくと、逆に『ワンピース』が1番で、『ナルト』の順位は下になっています。

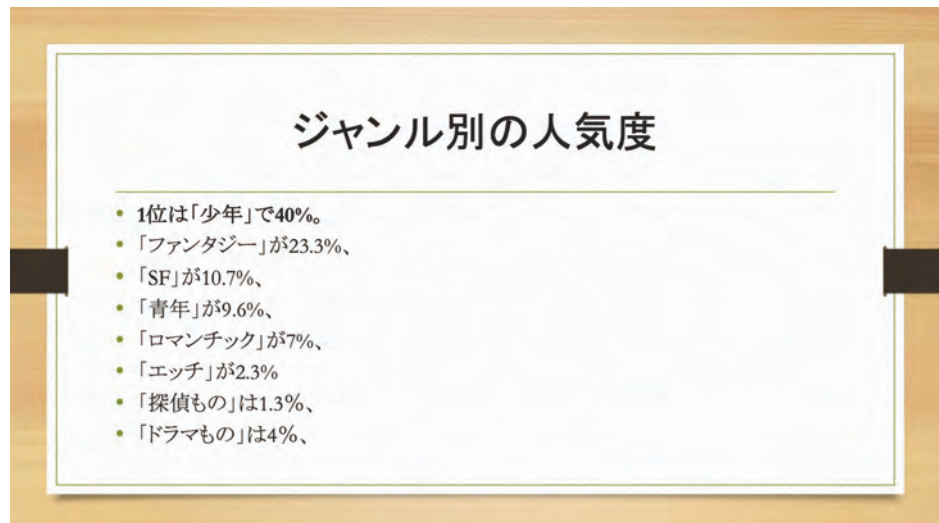
3. 理想郷／ユートピアとしての 日本的な創造力

面白かったのは『ナルト』の哲学です。ここがおそらく先ほどのレベント先生のお話と一番似ているところになります。トルコでは日本の文化の伝統的なところが維持されているという側面を大事にしています。

これは『NARUTO の哲学』という本ですが（スライド6）、これが英語で出版されて、さらにトルコ語に訳されています。勇気、決意、許し、忠誠、忍耐、楽観、誠実、自信など、日本にはこういう哲学があると紹介している本です。若者が惹かれてるのもこういう世界です。日常生活の中で少し不満を抱えている人は、信頼できるとか忠実とか、そういうことに憧れているようです。これは 13 歳・14 歳、20 歳の人でもかなり読みます。この本は人気です。本のバックカバーには日本語とトルコ語の単語の両方が出ています。日本語の漢字自体がトルコ人にとって多分一つのシンボルとして機能しているのです。先ほどのお話でカタカナがイメージを持てるように、漢字で書いてあること自体が意味を持っていま



スライド 6



スライド 7

す。

トルコの中学校の国語の先生に聞いたら、多くの学生がアニメに興味を持っているそうです (Virdil, M., & Karakus, N (2024))。女性生徒の方がよりアニメ、マンガに興味を持っていて、多くはファンタスティックな内容です。年齢的に不適切と思われる内容もあるのでそれだけは気になりますが、トルコの中学生にもアニメは人気があります。

ジャンル別にどちらが好きかと言ったら、「少年」が好きで、「ファンタジー」がその次で、「SF」などが続きます (スライド7)。

トルコの若者の関心はなんといっても「アニメ」です。アニメが1位で、83.7 パーセントの人が関心を持っています。マンガは 13.8 パーセント、ビデオゲームは 1.3 パーセントでだいぶ低く、日本のロックミュージックとか日本のポップミュージックは 1.2%なので、ほとんど興味を持ってないと言ってもいいかもしれません。

ただ一方で、我々研究者がアニメ・マンガ研究をしているかということ、トルコの日本研究者の中で、アニメ・マンガ研究に専門的に取り組んでる先生はほとん

どいませ。私はまだ出会っていませんが、ご参加の皆さんはどうですか？ マンガの研究者は少ないという認識でOKですか？ 一方でマンガで日本語教育を考えられるかというのも新しい分野でこれから研究するべきです。

もう一つ、今までの研究のほとんどがアンケートです。フィールドワークや論文のデータ分析をするとか、日本や別の国と比較するといった研究は少なくアンケート調査がほとんどです。調査対象も20歳代まで、つまりマンガ・アニメは20歳までの人が読む・見るものとされて30歳代以上は調査されていませんでした。一昨年私の学生が「マンガで日本語を学びましょう」という研究をして修士論文を書きました。面白かったですが、懸念することが多いです。

4. インドネシアとトルコのアニメ・マンガ事情の共通点としてファン・グループ

一方でアニメの共同体ができています。引きこもりの問題もちょこちょこ現れています。こういったサイトがいっぱいあって、日本の精神文化を受け入れようと、自分たちで翻訳しています。それが1番メインです。また、アニメ・マンガのHPは日本のニュースもたくさん伝えています。我々学者よりも若者のほうがもっと日本事情に詳しくなっています。

日本語イコール日本精神を「着る」ということで、日本語の文字が書いてあるTシャツを着る若者も最近多くなっています（スライド8）。日本語の漢字入りのものもすごく多く見られます。

これは何を意味するかというと、それになりたいという意味だと思います。私はこういう人になりたいからこれを着る。「日本精神になりたい」、もしくは「ナルトになりたい」かもしれません。



スライド 8

5. 結論

まとめとして、私の提案は「想像力の帝国」として日本語をもう1回見直した方がいかもしれないということです（スライド9）。「想像力の帝国」というのは大袈裟かもしれませんが、多分若者にとってそれが一つの自分のリラックスできる場所となっています。

ポップカルチャー論では、苦しみとかイデオロギーに反発したいところがあるということも確認しました。

2010年代のトルコの望ましい若者育成という政策と同じ時代に、アニメもマンガも大人気になりました。

また、日本語教育ではアニメはまだあまり使用されていないと思います。たまたま授業で少し見せるくらいです。アニメ・マンガは確かに非現実的です。でも、トルコの若者がそれを読むことによって自分の世界が広がります、考え方が広がります、非現実的だと言いながらも、現実の生活でそれを生かしたいということです。日本の精神文化、ナルトみたいに誠実でなりたいと思う若者が多いようです。

以上、私の言いたいことは大体そんなところです。何かの議論はまた後ほどにしましょう。

まとめ: 「想像力の帝国」への逃避

- ・ アニメ・マンガは日本の「想像力の帝国」で、「精神文化」のソフトパワーでもある
- ・ ポップカルチャーと「苦しみ」と反イデオロギー的な特徴がある
- ・ 2010年代にトルコ:「望ましい若者」政策⇒同じ時期にアニメ・マンガが人気
- ・ トルコではネット系アニメ・マンガ共同体が成立完成
- ・ 日本語教育ではアニメはあまり使用されず、マンガは少数
- ・ アニメにおける非現実的な環境
- ・ 身体に日本語・「精神文化」を自ら訳す⇒アニメ・マンガに中東の政治的な葛藤・騒動よりも豊かな創造力に走るトルコの若者
- ・ アンケート:「アニメは非現実的だが、自分の精神を発展させる」とトルコの若者

スライド9

〈参考文献〉

- ・ Adorno, T. W. (2021). *Kültür endüstrisi kültür yönetimi*, çev. N. Ülner, M. Tüzel, E. Gen. İstanbul: İletişim Yayınları.
- ・ Algül, F. N. (2021). Popüler kültürün dayattığı kitapların çocukların değerler önceliği üzerindeki etkisi. *Millî Eğitim*, 50(229), 205-231.
- ・ <https://otakudukkan.com/>
- ・ https://yenie.net/turkiyede-manga-ve-animelerin-sosyolojisi/#_ednref8
- ・ Virdil, M., & Karakuş, N. (2024). TÜRKÇE ÖĞRETMENLERİNİN BİR POPÜLER KÜLTÜR ÜRÜNÜ OLAN MANGAYA DAİR GÖRÜŞLERİ. *Uluslararası Türkçe Edebiyat Kültür Eğitim (TEKE) Dergisi*, 13(2), 688-709. <https://doi.org/10.7884/teke.1409059>

【第1部】

発表 3



イランの若者と 日本語・日本文化： メディア、教育、就職、そして未来展望

アヤット・ホセイニ

テヘラン大学

1. イランの日本語教育の沿革

今日のテーマは、イランの若者と日本語・日本文化ですが、皆さんの発表とは違い、自分の研究成果よりもイランの日本語教育のご紹介になると思います。よろしくお願いします。

まずはイランの日本語教育について、テヘラン大学を中心に簡単に説明します。皆さんご存知の通り、イランという国は中近東に位置しています。人口のランキングで言えば世界 17 位、面積のランキングでも世界 17 位です。ある意味でバランスがとれている国だといえるかもしれません。

そのイランの中にテヘラン大学というのがあります。イランで 1 番古く、1 番大きな大学です。1934 年に創立しました。教員が 3,305 人、スタッフが 3,500 人、学生の人数は 5 万 2,154 人です。

そのテヘラン大学の中に日本語専攻科があります。イランではさまざまなところで日本語は学べるのですが、イラン全体で唯一日本語専攻として学位をもらえるのはテヘラン大学だけです。

また、テヘラン大学には日本語専攻以外に、一般市民向けで誰でも学べる公開講座というのがあります。この公開講座もそうですが、民間の教育機関なども含め、一般市民に日本語を教えているのは、ほぼ全員がテヘラン大学の卒業生です。これも実はテヘラン大学の 2 か所にあります。後で説明します。

それ以外に、最近は instagram などを活用してデモ授業を行い、学習者を募集してプライベートで日本語のオンライン授業を行っている人も少なくありません。そういうやり方で日本語を学んでいる人も多くなっています。

また独学で日本語を学んでる人も最近非常に増えています。YouTube などのアプリを使って自分で日本語を学んでいます。

この写真はテヘラン大学の真ん中にあるモスクです（スライド1）。昔から非常に人気があって、記念写真などを撮る絶好のスポットとなっています（スライド2）。



スライド1



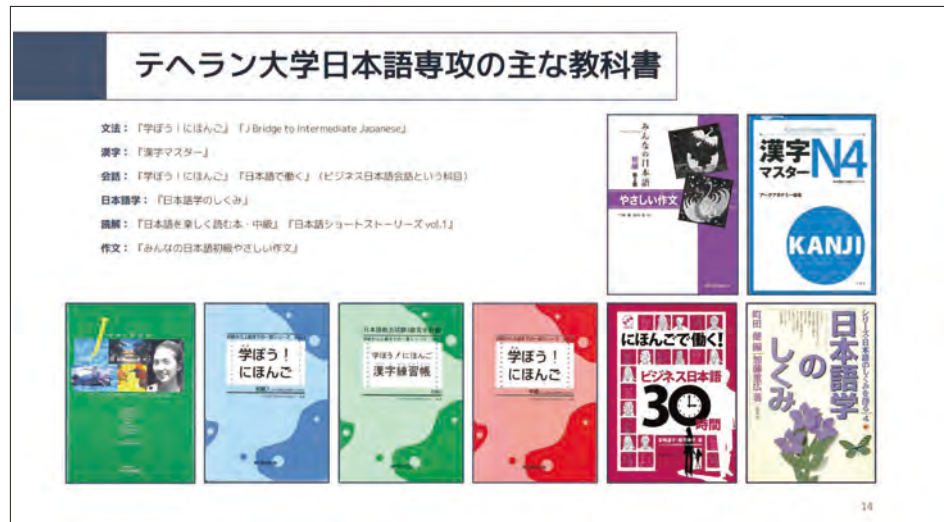
スライド2

2. テヘラン大学外国語学部の日語教育

テヘラン大学には外国語外国文学部がありまして、我々はそのに属しています。

さて、テヘラン大学における日本語教育の歴史は、まず、1989年に外国語学部の必修選択の第二言語として日本語コースが開設されたところから始まりました。その後、1994年に日本語・日本文学専攻が設置され、2008年に修士課程（日本語・日本語教育研究科）が開設されました。学士課程は日本語・日本文学で、修士課程は日本語教育になっています。

さらに2013年から、世界研究学部あるいは世界研究科という我々の隣の学部ですけれども、そこに日本語ではなく、ジャパニスタディーズという日本研究科が始まりました。ここは修士課程までとなっています。そして、2年前の2023



スライド3



スライド4

年から外国語学部の中に日本語専攻と中国語専攻と韓国語専攻が一緒になって、東アジア言語文学科が設置されました。ちょうど去年 2024 年がテヘラン大学の 90 周年、そして日本語専攻の 30 周年でした。

教員数は 2021 年から 1 名減って、現在は教員 5 名と非常勤で教えているネイティブの先生が 1 名、合わせて 6 名です。教授もまだいません。毎年入ってくる新入生は、学士課程（日本語日本文学）が 25 人から 30 人までで、修士課程（日本語教育）が 6 人から 9 人までということになっていて、現在学士課程で 106 人、修士課程で 16 人、合わせて 122 人の学生が在学しています。

使われている教材などについてもよく聞かれますが、多分皆さんおなじみの教材です。日本語教育関連の方はもうご存じの教材ですけれども、初級文法などは『学ぼう！にほんご』という教材を使っています（スライド3）。

学生が行っている活動もさまざまです。例えば毎年日本語劇を行います。過去の例ですが、例えば菊池寛の「父帰る」、岸田國士の「紙風船」、木下順二の「夕鶴」、三島由紀夫の「弱法師」などをやりました。これは「父帰る」を上演しているシーンです（スライド4）。

日本語劇以外に、声劇というのも毎年やります。簡単に言えばラジオ劇みたいなものです。声だけを録音して行う劇で、新美南吉の「手袋を買いに」のような日本の作品もあれば、「マルズバン・ナーメ 二つの寓話」のようなイランの作品を日本語に訳して声劇にするやり方があります。単なる声劇ではなくて、学生が



スライド 5

文学のクラスの発表



スライド 6

2023年の秋・入学式



スライド 7

自分で絵を書いて、声劇のために簡単なアニメーションみたいなものを作ります。ご覧になりたい方は YouTube のリンクがあるので後でご一報ください。テクニク的には非常に簡単ですが、こういう簡単な絵を書いて、アニメのように作って上映しています（スライド5）。

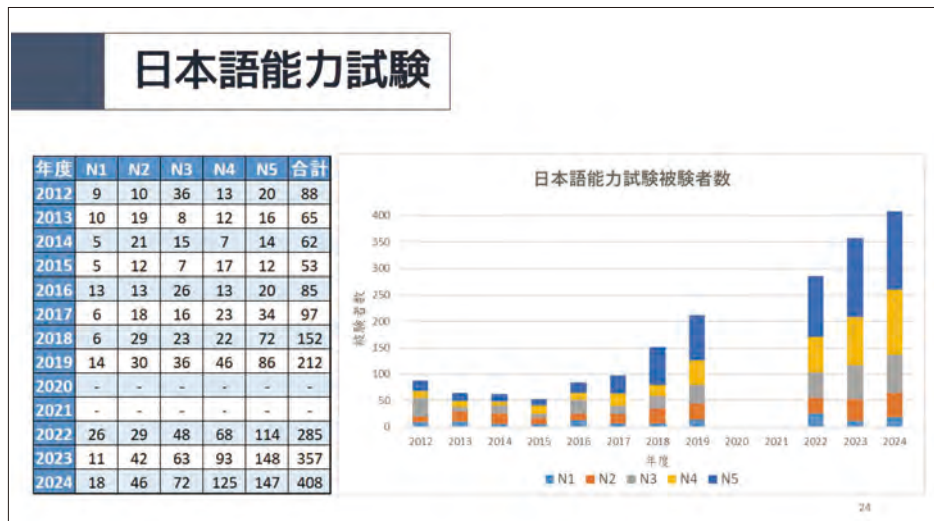
スライド6は近現代文学の私の授業で、学生が発表しているところです。スライド7は新入生を迎えるときのイベントで、毎年学生が企画しています。浮世絵などをモチーフに使って、大学のいろんなところを紹介したりしています。

たまに海外からの先生を招いて講演をしていただくこともあります。スライド8は日本国際交流基金の蟻末淳先生が2024年にいらした時の写真です。

日本語能力試験（JLPT）も2012年から行っていますが、ご覧の通り、受験者の人数が毎年増えてきて、2012年に88人だった受験者が去年2024年は408人になりました（スライド9）。グラフにしてみますと、棒グラフの一番上、青色のところは援護レベルを示しているのですが、ご覧の通り、援護レベルの受験者がだんだん多くなってきているのがわかります。援護レベルを受けているのは我々の学生ではなくて、一般市民というか、外で日本語を勉強している人ですから、日本語に興味ある方の人数も増えつつあるということの証拠になります。



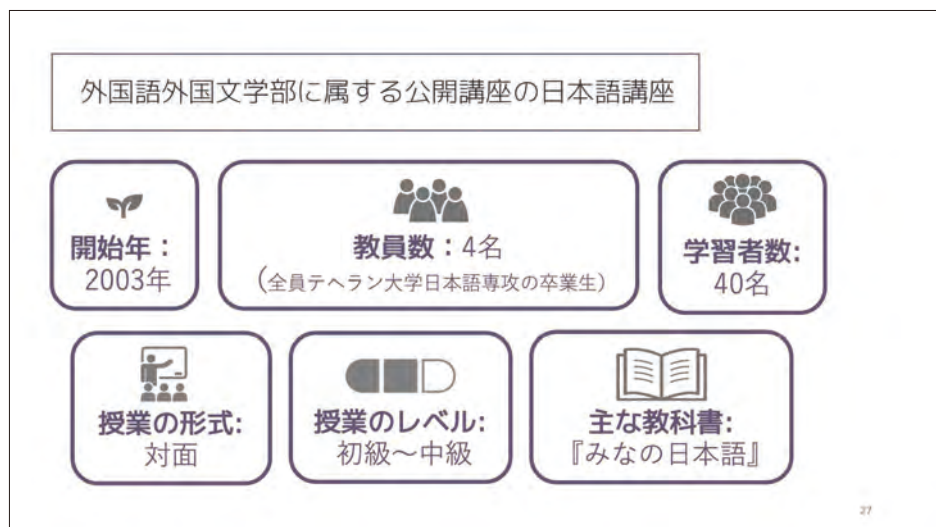
スライド8



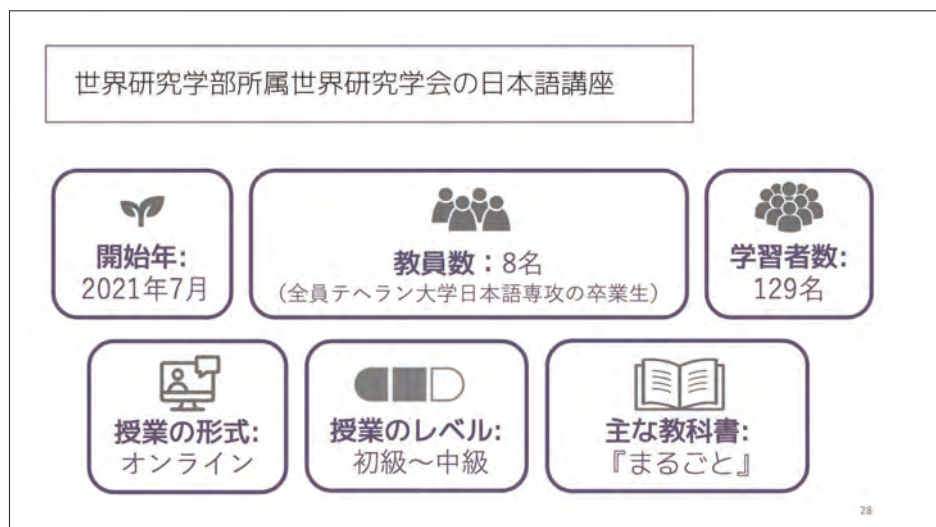
スライド9

3. テヘラン大学公開講座の日本語講座

先ほど公開講座が2か所あるというお話をしましたが、それは私たちの外国語学部外国語外国文学部に属する公開講座と世界研究学部属する公開講座です。時間の関係で具体的な説明は省きますが、私たち外国語学部の公開講座は対面授業だけ（スライド10）、世界研究科の公開講座はオンライン授業だけになっています（スライド11）。



スライド 10




スライド 11

4. 今後のイランの日本語教育の展望

問題点とこれからの展望の話に移ります。まず就職の問題があります。日本語専攻の卒業生の就職の問題です。15年前ぐらい前の私たちの学生時代は、イランと日本の経済関係が非常に強くて、イランには石油関係などの日本の企業がたくさんありました。その時は仕事先が色々ありまして、日本企業に勤めたり、ツ

SNSを活用した卒業生の日本語教育活動



- ・就職先が限られる中、多くの卒業生は日本語教育を自主的に展開
- ・InstagramなどのSNSを活用し、デモ授業を発信・学習者を募集
- ・個人でオンラインまたは対面の日本語授業を実施
- ・副業やフリーランスの形で活動を継続する卒業生も増加中



スライド 12

アーガイドをやったり、フリーランスの形で翻訳・通訳の仕事をしたり、そういうチャンスがたくさんありました。ところがアメリカの経済制裁が始まってから、日本の企業もイランから出ていって、現在はイランと日本の経済関係はほぼゼロという形になっています。

そういうことも影響して、日本語専攻卒業生の就職先が大幅に減少してしまい、暗い話になりますが、日本語専攻の人气が低下傾向にあるというのは残念ながら現実です。

そこで、自分でできる仕事を考えて、実践する学生も現れました。例えば、instagram で、デモの日本語授業を行い、学習者を募集するやり方などです。スライド 12 の写真は、アイダさんという卒業生がinstagram で日本語の授業を行っている様子です（本人から許可いただいて掲載）。

現在の問題点は大きく分けて四つあると考えています。

一つ目は東アジアの他の国の言語も人気となり、日本語の人気ランキングがやや低下していることです。昔はイランで東アジアといえば日本、日本語にライバルはいませんでした。ところが最近では、韓国語と中国語の人气がとて高くなっています。韓国は K-pop や K ドラマ人気から、中国はイランと経済的な関係が強いので中国語ができると仕事を見つけやすいからです。

二つ目は、昔は日本国際交流基金から専門家が派遣されていましたが、その派遣が近年行われていないので、現行の教授法や教材などの改善が十分に行われていないことです。

三つ目は、新しい教材などを手に入れるのが非常に難しくなっていることです。経済制裁の関係で amazon などを使って簡単に教科書を購入することができません。イランの国民は国際的に使えるようなクレジットカードが作れません。そのため教材のアップデートなどがあまりされていない現状があります。

四つ目は、繰り返しになりますが仕事の話です。卒業生の就職先が限られているために、学生たちは学ぶ動機を喪失しています。

それではまとめとして、最後に私たちの今後の展望についてお話しします。

今私たちが企画しているのは、まず日本国際交流基金や他の日本の教育機関といったさまざまな団体の力を借りて、テヘラン大学日本語専攻の日本語教育内容について専門家の方にご検討いただき、改善の助言をいただきたく思っております。

また、現在、テヘラン大学日本語専攻の修士課程では日本語教育のみが提供されていますが、なるべく翻訳学（日本語・ペルシャ語）なども導入したいと考えています。日本語教育だけではなく、翻訳・通訳の学科を作ればまた人気になると思います。トルコのアンカラでも翻訳・通訳の学科ができているという話を伺いましたので、それは非常にいいと思いました。

それから、テヘラン大学は修士課程までありますが、日本に留学したくてもできない人もいますので、イラン国内でも博士課程を企画することについても考えています。また、テヘラン大学に属する二つの公開講座もまた日本のジャパンファンデーションなどの力を借りて、もっと積極的にサポートしていきたいと思っております。

最後に、日本語専攻はテヘラン大学1か所だけにありますが、テヘラン大学以外の大学でも日本語教育を展開したいと考えています。

今日の発表は以上です。また何かあればディスカッションの時に是非ご指摘ください。ありがとうございました。

第1部
【討論】

中近東の日本語・日本文化イメージを再考察する

司会：岩田 和馬（東京外国語大学）

オンラインQ&A：シェッダーディ アキル（慶應義塾大学）

指定討論者：孫 建軍（北京大学）

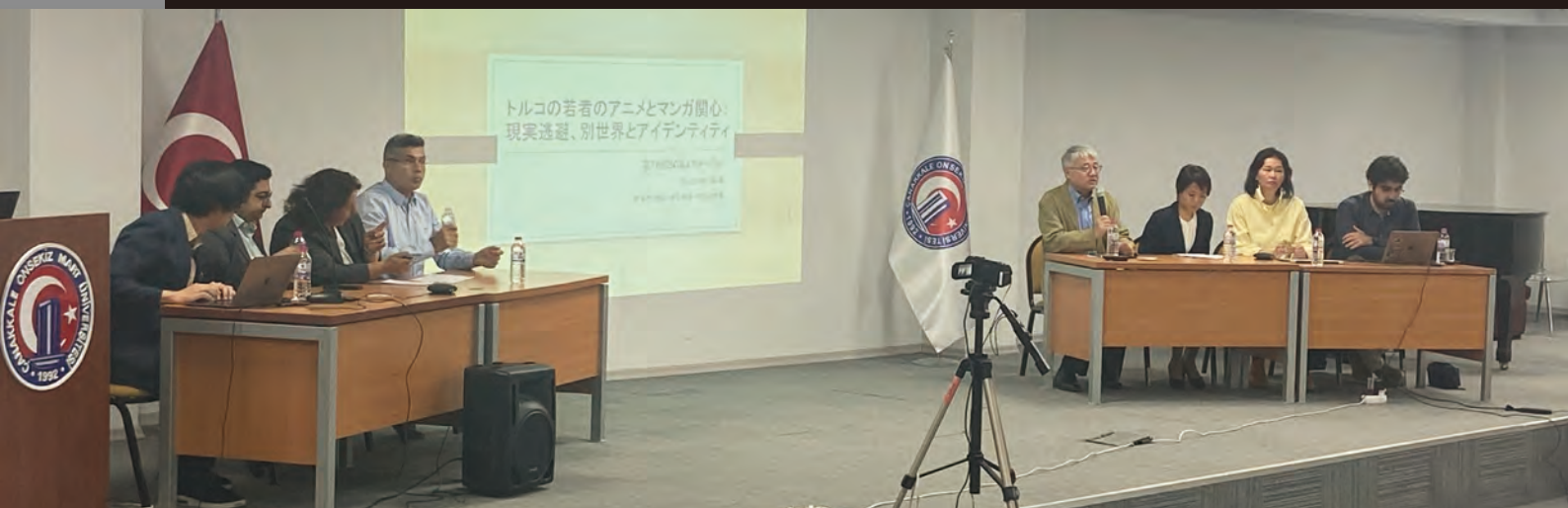
市村 美雪（チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学（COMU））

シヨリナ ダリヤグル（筑波大学）

討論者：レベント・トクソズ（テキルダール・ナムク・ケマル大学（NKU））

チェリッキ・メレキ（チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学（COMU））

アヤット・ホセイニ（テヘラン大学）



岩田 それでは続きまして、討論に入りたいと思います。指定討論者の孫先生、市村先生、ダリヤグル先生、発表者のレベント先生、メレキ先生、アヤット先生もご登壇ください。

それではまず、討論者の先生方からコメントをいただければと思います。

孫 北京大学の孫建軍と申します。今回のフォーラムは渥美財団の奨学生たちがメインとなって企画し、こちらの大学の協力を得て行われています。私は2002年度に渥美財団の奨学金を得て、順調に学位を取った後、中国に戻って仕事を始めました。学生のみなさん、将来日本に留学して博士課程で学びたいとお考えなら、ぜひ渥美財団の奨学金を狙ってみてください。

本日は、3名の先生方のお話を伺って大変勉強になりました。私は日本語の勉強を始めて数十年になります。日本語教育に携わってからでも20年以上になるのですが、これまでは主に中国を中心とした日本の周辺国、いわゆる漢字文化圏で日本語教育を考えることがほとんどでした。今回、非漢字文化圏のトルコに来て、先生方と交流することができ、大変勉強になりました。

1人目のレベント先生のお話では、日本語を勉強するトルコ人学生の外来語に対するイメージを考察していただきました。考えてみれば、中国人にとって漢字は日本語を勉強するときかなり役に立つものですが、非漢字圏の学習者にとっ

てはおそらく漢字は難点だと思うのです。でも実をいうと、漢字の組み合わせによってできた新しい漢字語彙は、中国人にとっても外来語なのです。

例えば先ほどレベント先生のお話の中に出てきた「積極」とか「消極」とか、あるいはメレキ先生のお話の中に出てきた抽象的な概念はほぼ日本で作られた漢字語彙です。日本で作られ、それを今中国人が外来語とは思わないで無意識に使っている、あるいは利用しているのです。一方で、カタカナの言葉を勉強する際、北京大学の私の学生たちは皆さんと同じようにかなり英語ができるのでそんなに苦労はしないのですが、普通の中国人はまだ英語力が足りず、外来語としてのカタカナを覚えるときに抵抗を感じたりする理由は、文化的なものではなく、単に英語力が足りないだけではないでしょうか。

国によって外来語に関する、あるいはカタカナ語に対する気持ちがいろいろ変わってくるなどのお話を、本当に興味深く伺っておりました。長くなりましたが、私のコメントは以上です。

市村 市村と申します。先生方、ご発表ありがとうございました。それぞれにとっても興味深く、自分が今教えている環境のことと重ね合わせながら聞かせていただきました。

まず、レベント先生のご発表のカタカナが最初の難問だということは、実は私は、そういう風に思っておりませんでした。会場でご参加の学生の皆さん、どうですか？ あ、はいって頷いてますね。カタカナを苦手と思う学生が多いのは、確かにそうだと感じてはいたのですが、ひらがなが終わった後に、またもう1回最初から覚え直さないといけないことに抵抗があるみたいな、そんなふうに私は思っていました。でも、実はそういう理由ではなくて、もっと意味的な使い分けで困っているかもしれないし、そもそもやはり伝統を崩すといった悪いイメージがある、そういう抵抗感もあるということを知って、これからの教え方を考えたいと思いました。

メレキ先生のご発表のアニメ・マンガについてですが、やっぱりすごい人気ですね。アニメを見て日本語を選びましたという学生も結構いたりするのですが、日常的な不満があって、そこからの憧れであったりとか、逃避したりという意味合いがあるという分析が非常に面白いと思いました。全く考えていなかったことです。また、メレキ先生がご発表でおっしゃっていた、トルコは「話す文化」、日本は「書く文化」というのも面白いと思いました。読むよりも見る方がトルコでは一般的だということもおっしゃっていましたが、今、予備クラスが終わりかけの学生ですとか、1年生になった学生などが、マンガを日本語のオリジナルで読み始めています。見ていたアニメのマンガを今、オリジナルの日本語で読めるようになったことで、また一つ、達成感・満足感のようなものを感じているようです。そんなことを思い出しながら、聞いておりました。

そして、アヤット先生。イランのテヘラン大学の日本語教育事情は、なかなか聞く機会がないことでしたので、本当に興味深く拝聴しておりました。

大きな問題の一つは、やはり就職ですよ。非常に難しい課題だと思います。こちらの日本語教育学科に入ってくる学生たちも、将来のこと、就職のことを考

えて入ってくるという学生がかなり多いと思います。

トルコの場合はまだまだチャンスがあって、日系企業に就職するといった機会には恵まれているかと思うのですが、ここは実は日本語教育学科ですので、では卒業後、教育関係の職に就けるか、日本語教師になれるかという、そちらの方はまだまだチャンスが少ないという現状があります。教師の教育を学ぶ学科なのに教育関係の就職の機会が少ないと、やはり教師としてのモチベーションは下がってしまいます。同じような問題を抱えていると思って聞いておりました。ではどうしたらいいかということは、皆さんで議論したいと思います。以上です。

ダリヤグル 先生方、ご発表ありがとうございます。非常に興味深く聞いていました。私は、出身はカザフスタンですので、他の地域の日本語教育の状況はあまり聞く機会がありません。非常に貴重な時間になりました。

まず、レベント先生の意外な側面からのお話、カタカナの捉え方が非常に面白くて、学習者の日本とか日本人、あるいはカタカナに対するイメージをある程度把握しておくことは、教師として非常に重要なことだと改めて考えさせられました。

先ほどレベント先生が提示された日本のイメージはだいたいポジティブなことでした。学習者が日本語を学ぶ際にポジティブなイメージがある場合はあまり葛藤をおきないように思います。もし何かネガティブなイメージを扱った先行研究などの事例がありましたら伺いたいです。そのときは教師としての態度はどのようにすればいいだろうかなどと考えながら、非常に興味深くお話を伺っておりました。

メレキ先生も、現実から逃げて、別の世界に行ける手段としてマンガやアニメなどにはまる、そういうことがあるのだと、データを拝見しながら思っていました。というのは、日本語の授業はもちろん勉強したり、話す、聞く力を伸ばしたり、そういう授業ですが、そこに先生がおっしゃったように、これからマンガとかアニメを実際に取り入れる方法にはどういうやり方があるのか、これからの大きな課題ではないかと思います。

実はメレキ先生が見せてくださったアニメやマンガのリストを拝見しても、私は「ナルト」しかわかりませんでした。学生からすればアニメやマンガは日本語とか日本の文化を知るための大切なリソースですので、やはり教師側は無視してはいけなと感じました。教師の負担にはなりますが、ちゃんと読まないといけない、見ないといけないですね。

最後にアヤット先生のご発表ですが、イランとカザフスタンには共通点があると思いました。カザフスタンの日本語教育はどちらかというと孤立環境です。というのは、学生は教室以外ほとんど日本とか日本人とか接触する機会がなくて、その結果、卒業してもあまり就職先もないというのが現状です。ただ、カザフスタンの場合は、直接日本人と接触できなくても、カザフスタン人同士で小さい日本というコミュニティを作って、その小さなコミュニティの中で習得した日本語を生かしています。ただそれだけで就職がないというのは無視できない問題です。私も日本語教師として何ができるのかいつも迷っていて、これは切実な課題だと思います。一般市民の人々が日本語に価値を見いだして、おそらく趣味という感覚で勉強しているのではないかというのも、非常に面白いと思いました。

本日の先生方のご発表の共通点として感じたのは、日本語教育における多様性です。例えば以前の日本語教育は、日本文化を固まった形として捉えていたように思うのです。日本人らしさとか正しい日本語とか、それを固定化されたスタンダードな形で一方的に教えるというか伝えるというか、そういうパターンが多かったように思います。でも、現場の当事者という立場から、私たちの学生たちは日本語をこのように捉えているといったお話を伺い、主体性を持って日本語とか日本語文化を捉え直すのは大切なことだと感じました。おそらくこれからの日本語教育は、多様性という言葉がキーワードになると思います。それぞれの現場はどういう特徴、どういう特性を持っているのか、そういう議論が必要ではないかと思います。

ただし、みんな違ってみんないいということで終わるのではなくて、日本語教育にはいろいろなあり方があり得ると認識し、どういう捉え直し方があれば日本語教育の新たな価値が見えてくるのかを考えたいと思います。長くなりしましたが以上です。

岩田

討論者の先生方、ありがとうございました。オンライン参加の皆さんからいただいた質問には後でまとめてご回答いただこうかと考えております。それでは発表者の皆さま、指定討論者の方々へのご回答をよろしくお願いいたします。

レベント

それでは一つだけ。日本人に対してネガティブなイメージは全くなかったのかというご質問でしたが、私が見た限りでは、人間関係の目線で友達にはなりにくいといったような回答はありました。ただ非常に少なかったので、私の分類ではその他というグループに入れております。

メレキ

私はレベント先生のカタカナに少し引っかかりました。ここには中国の先生もいらっしゃるし、カザフスタンの事情もわかる、イランの事情もわかる、そういうせっかくの機会なのでお聞きしたいのですが、トルコの若者は、日本文化自体にはまっていると言ってもいいと思いますが、その中にヨーロッパ的な要素は入れたくないと思うのです。英語は英語で大丈夫、日本文化はまた別のものとして扱いたい。ですから漢字は入っていていいし、むしろかっこいい。ひらがなも平安時代からのものだから良い、でもカタカナは「何このカタカナって」といった思いが自分の中にも確実にありました。日本人はどうして「コップ」とカタカナで書くのだろうか。書かなければいいのになどと思っていました。その理由として、我々はもしかしたら昔から「日本＝自分の伝統をすごく大事にして守る国」だという先入観があるのかもしれない。中国の場合は、日本語または日本に対してそういうカタカナ＋文化的な認識に繋がる場所があるのでしょうか。カザフスタンの学生はどうでしょうか。せっかくの機会なので、教えていただけたら助かります。

もう1点、日本語教育学科、教育の修士課程のプログラムがあるとおっしゃいましたが、どんな論文を書いているか、一つ事例を教えてくださいませんか。

ダリヤグル

カタカナについてカザフスタンの学習者が困難に感じていること、それは100

パーセントあると思うのですが、その反面、英語やフランス語がわかると、なんとなく通じるという嬉しさもあります。たとえばサッカーとかテレビとかもそうですし、コンピューターは少し古い言葉ですが、話題としては多分、和製英語は英語とはいっても日本語で作られたものといったことぐらいでしょうか。日本語学習におけるカタカナについては、先ほどのご発表を伺って私も初めて認知したところなので、これからカタカナに関する授業を計画するときの参考にしたいと思います。

孫 中国の私のクラスでは、カタカナをボイコットする、あるいは抵抗を感じる学生は、あまりいないのです。なぜかというと、日本という国はその時その時の世界の中で進んだ文化を取り入れた形で成り立っています。もちろん伝統を守っているところもあるのですが、常に世界中の新しい情報をキャッチしながら、それを日本語に反映させていっているということをぜひお伝えいただければと思います。

日本語教育に携わっている日本人の先生と一緒にフランス語のフランス料理屋さんに行ったことがあります。カタカナばかりのメニューはもちろんのこと、先生同士の話している日本語も「です」「が」「は」「を」以外は、料理名、飲み物、食器名など、ほとんどカタカナだったので、とても違和感を覚えていました。そういう意味では、むしろ皆さんのほうが文化的に近いので、羨ましく思います。

アヤット まず1番目の質問ですけれども、学生が日本文化に西洋のものを入れてほしくないと思う気持ちについては、イランも全く同じ感じです。私自身も学生の時にそういう考えを持っていました。初めて日本に行った時、成田空港の近くのホテルに泊まっていたら、日本人の女性の方が来て、フロントで鍵を受け取って「サンキュー」と言ったのです。そのサンキューを聞いて私はショックを受け、心の中で悲しくなりました。どうしてありがとうじゃなくてサンキューなんですか、と思ったのです。

2番目の質問については、うちの学生が書いている修士論文をよろしければ後でEメールでお送りします。例えば一つの例として、去年私の学生が書いた論文は、「日本語教育におけるアニメのマイナスの影響」というテーマです。授業を受けずにアニメだけで日本語を学んでる人がどういう問題に直面するかということについて論文を書いています。例えば敬語などはあまりきちんと使えないとか、そういう話です。私の方からは特に質問はないので、以上です。

岩田 それでは、討論の方も出尽くしたかと思しますので、第1部はここで終わりにさせていただきます。最後に、アキルさんから何かありますか。

アキル 本日のQ&Aの質問の5件がありまして、コメントも3件ありますが、時間も延びてしまったので、午後の部でご紹介させていただきます。

【第2部】

日本における
イスラム
コミュニティの
日本文化受容と
日本語教育

発表 4



在日の中東出身者における 日本語習得過程の 変容と影響要因に関する 考察

アキバリ・フリーエ

神田外国語大学

私は、「在日の中東出身者における日本語習得過程変容と影響要因」に関する
ことについて調査いたしましたので、本日はこの調査結果についてお話をさせて
いただきたいと思います。

第1部の発表では、中東のトルコやイランでの日本語教育についてお話をされ
ました。私は中近東から日本に渡り、日本で暮らしている人々に焦点を当てて、
中近東地域から日本に渡っていった彼らが日本で今、どういった状況で学習して
いるのか、そして実際に自分の国で学んだ日本語をどれくらい生かすことができ
ているのかなどについて見ていきたいと思っています。

中近東というと広い地域を指しますが、全体的な共通点として考えられるのは、
宗教的背景が比較的近いことです。宗教的背景が近いということは、習慣や文化
的背景も近いといえます。そして、調査結果から多言語話者が多いことも特徴で
あることがわかりました。

「宗教的背景が近い」「習慣・文化的背景も近い」「多言語話者が多い」という
三つの共通点が挙げられます。

1. 本研究の背景と目的

まず、本研究の背景と目的ですが、背景には中近東における日本文化・日本カ
ルチャーへの関心の高まりがあります。先ほどメレキ先生も、日本のポップカル
チャーが中近東でも若者の間などで大変人気になっているということでした。ど
うして人気になっているのかというと、ネットの普及などによります。日本のカ
ルチャーやアニメ・マンガは国境を超えて世界各国で知られるようになっていま
す。

人々の日本文化への関心は世界的に広がっているのですが、今こちらで勉強し

本研究の背景

➤ 日本に滞在する外国人ムスリムの総数は約29万4,385人と推計されている。

➤ 2024年の在日中近東出身者の人口

- イラン 約4000人
- トルコ 約7500人
- エジプト 約1500人
- サウジアラビア 約400人
- シリア 約1400人

スライド 1

ている皆さんのように、おそらくアニメとかマンガとか何かそういう日本のカルチャーに魅力があって日本に関心を持つと同時に、その国の言語、日本語に対しても関心が高まります。日本語に関心が高くなると、その国に行ってみたい、いつか留学してみたい、その国に住んでみたいといった気持ちが高まってくる、そういう自然な流れがあると思います。

今日本には多くの外国人が住んでいるのですが、外国人のコミュニティーの中で知られているものの一つがムスリムというか、イスラム教国から入ってきた外国人です。現在日本に住んでいる外国人ムスリムは29万4000人ぐらいと、とても大勢の人々がいます。2024年時点では、約35万人とも推測されています(店田2025)。その中から中近東の人たちを取り出してみます。イスラム教の背景を持つ人たちはインドネシアなどの東南アジアにもたくさんいますので、その部分を差し引いて、私が注目したいのは、イランとかトルコとかエジプト、サウジアラビア、シリアなどの中近東の人たちです。2024年現在のデータから、これぐらいの人数が日本にいたことがわかります(スライド1)。

本研究は、中近東地域の出身者で日本語を勉強している人たちは、もしかしたら特有の課題を持っているのではないかという疑問から出発しました。個別の学習者に焦点を当てて継続的な学習経過を追跡することで、送り出しの国及び受け入れの国双方の教育体制におけるカバーされていない空白や、学習者の課題を明らかにできるのではないかと、少し大きな目的というか希望を持って見えています。

例えばトルコでいえば、日本語を教えているこの学校の日本語学科のような機関が送り出しの場所だとして、それに対する受け入れ国が日本です。日本に行く前に自分の国で日本語を勉強することと、日本に行ってから日本語を勉強することの間のつながりを見ることが、まず必要なのではないかと思っています。

あともう一つ、この研究を通して知りたいと思っているのが、AIに関することです。近年はChatGPTに代表されるAI技術やネットワーク技術が急速に発展しており、こうした技術革新が日本語教育にどのような影響を及ぼしうるかも検討すべき課題だと考えています。

そして最終的に私自身とても興味があるのが、日本語を勉強するのは何のためなのかということです。日本に行く外国人にしてみれば、もちろん日本での生活の質を上げるためだったり、日本人と良い交流をしたりするためだと考えられます。日本で最近話題になっている「多文化共生」は、いろいろな文化の人が共に一緒に生きていくために必要なことです。外国人にとって1番の壁はまずは日本語ですが、日本語ができるようになれば、多文化共生がうまくいくかということ実はそうはいかないのです。

本研究の到達目標は「多文化共生推進へ向かう」ことです。日本語能力を有する多様な人々が、その力を生かして日本社会の一員として共に歩めるような仕組みづくりにつなげたい。そのために日本語教育機関も何か協力できたらと思っています。

そこで今回の調査では次の三つに焦点を当てました。

一つ目は「日本語学習のタイミングと意識の変化」です。来日前にどうやって日本語を勉強したのか、そして来日してからどうやって日本語を学習したのか。そこに何か意識の変化があったのかを見ていきたいと考えました。

二つ目は、「学習内容の実用性と課題」です。先ほども言いましたが、本国で学んだ日本語が実際に本当に活かされているのか。そして来日後の生活や社会適応にそれがどの程度生かされているかということです。

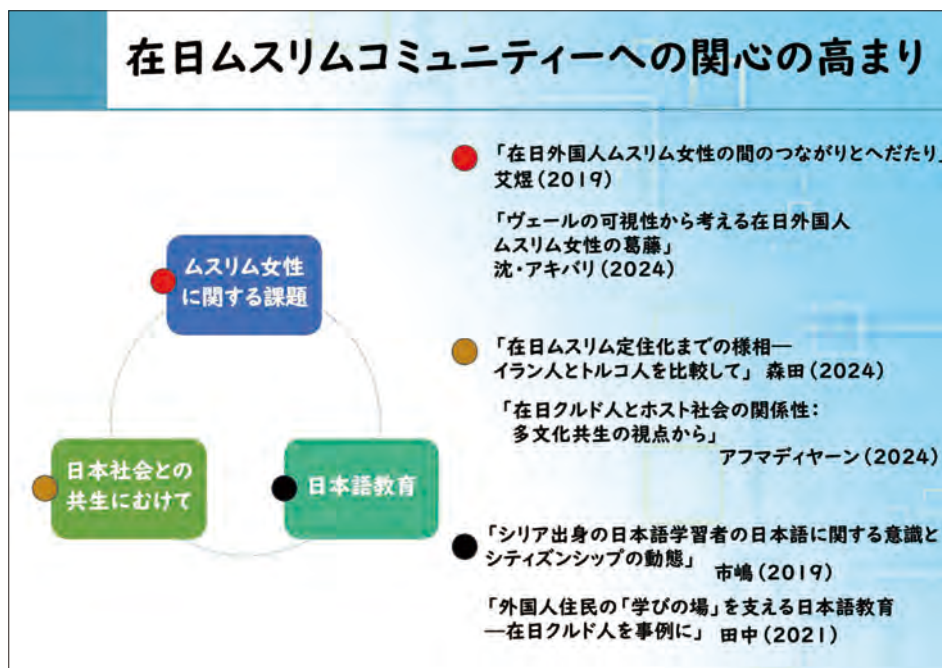
三つ目は、「日本語能力と社会統合の関連」です。日本語能力が、彼らの日本社会への適応・多文化共生・社会的ネットワーク形成に与える影響に注目しました。私が今まで個人的に研究してきた内容も三つ目に近いので、特にここを重視したいと思っています。

2. これまでの研究

日本に住み、イスラム背景を持っている在日ムスリムのコミュニティーについては、実は今までもたくさんの研究がされています（スライド2）。例えば、ムスリムの女性に関する課題などもよく取り上げられるテーマです。私も昨年2024年に「ヴェールの可視性から考える在日外国人ムスリム女性の葛藤」という論文を出していますし、「在日外国人ムスリム女性の間のつながりとへだたり」などの先行研究もあります。

もう一つ、よく論文で取り上げられているのは、やはり「日本社会との共生」です。ムスリムの人たちは見えやすいので、「在日ムスリム定住化までの様相—イラン人とトルコ人を比較して」とか、「在日クルド人とホスト社会の関連性—多文化共生の視点から」など、多文化共生の視点で見ている研究もたくさんあります。

あとは「日本語教育」に関する研究ももちろんあって、「シリア出身の日本語学習者の日本語に関する意識とシティズンシップの動態」や「外国人住民の「学びの場」を支える日本語教育—在日クルド人を事例に」など、中東とかイスラム



スライド 2

圏の人たちを中心にした研究もあります。これらの論文でいう彼らの日本語教育は日本に来てからのものですが、日本に来てから彼らがどのように日本語と接してきているのかという研究もいくつかあります。

3. 本研究の概要と方法

では、早速私の今回の研究の概要と研究結果の報告に移りたいと思います。調査時期は今年 2025 年 3 月から 4 月にかけて、調査方法は半構造化インタビュー（フリック 2011）をオンライン形式で行いました。インタビューに使用した言語は主に日本語ですが、イラン人の被験者に対してはペルシャ語でインタビューをしています。

主な質問内容としては、「母国での日本語学習法」、「来日後の日本語学習とそれに関連する経験」、「日本社会での社会的ネットワークの作り方と構築」、この三つを設定しました。

被験者の特徴ですが、イラン、アラブ首長国連邦、イラク、モロッコが各 1 名、シリアは 2 名です（スライド 3）。トルコの方も少し調査できたのですが、まだ分析ができていないので残念ながら今回のデータには入っていません。ちょうど女性 3 名と男性 3 名からデータを取ることができました。

国籍もバラバラで、年代も 20 代後半から 50 代前半です。使用言語についても伺ったところ、皆さん多言語話者です。例えば、2 番目の被験者のシリアの出身の方は、五つの言語を話すことができるということで、大変な多言語話者でした。多言語話者にはどういうメリットがあるのか、あるいはデメリットがあるのかに

被験者の特徴

	被験者	性別	国	年齢	使用言語	滞在歴	職業
1	An	女	UAE	30代	アラビア語、英語、日本語	5年	漫画家
2	Im	女	シリア	20代	アラビア語、英語、日本語、ヒンディ語、トルコ語	2年	主婦
3	Hs	男	シリア	50代	日本語、英語、アラビア語	23年	研究員
4	Ya	男	イラク	30代	日本語、英語、ドイツ語、アラビア語	10年	会社員
5	Ak	男	モロッコ	30代	フランス語、日本語、英語、アラビア語	9年	教員
6	At	女	イラン	40代	日本語、ペルシア語、英語	7年	研究員

- 日本語能力：中上級
- 職業：高学歴・高度人材（1名主婦）
- 日本語への関心のきっかけ：アニメ・まんが/日本への移住意向
- 日本語学科の学生ではない

スライド3

については、後ほど調査結果のところでお話ししたいと思います。

滞在歴は皆さん結構幅があるのですが、日本語能力は皆さん中上級レベルですので、生活には支障がない上級者レベルと考えていいと思います。

職業については、UAE出身の方は漫画家だったりシリア出身の女性は主婦だったり、研究員の方もいらっしゃいますが、全体的に皆さん高学歴で、日本で言うと高度人材として考えていいと思います。

日本語への関心のきっかけは、やはりアニメ・マンガが1番ですね。1名だけは日本は移住したいという意向からで、特にアニメやマンガは見てないと言っておられました。

特徴の最後として、皆さん日本語学科の学生ではなく、自分独自で勉強しているということも一つポイントとして挙げられます。

分析方法はコーディング法です。当事者にインタビューをして、そこから彼らの考え方や感じ方、当事者の行為の意味とかを理解することを中心に据えました。インタビューしてからそれを文字化してコーディングした後、大カテゴリーと中カテゴリーに分類しています。その中で私が注目したコードは、「日本語学習に関する語り」のところに、「日本社会での経験やネットワーク作りに関する語り」です。

4. 分析の結果

それでは分析の結果を発表いたします。インタビュー調査の語りの内容をまず大きく三つのカテゴリーに分類しました（スライド4）。

一つ目の「来日前の日本語学習環境」についてよく語られていたのが、「日本語の学習での困難」です。「経済的負担の問題」もありました。それから「オン

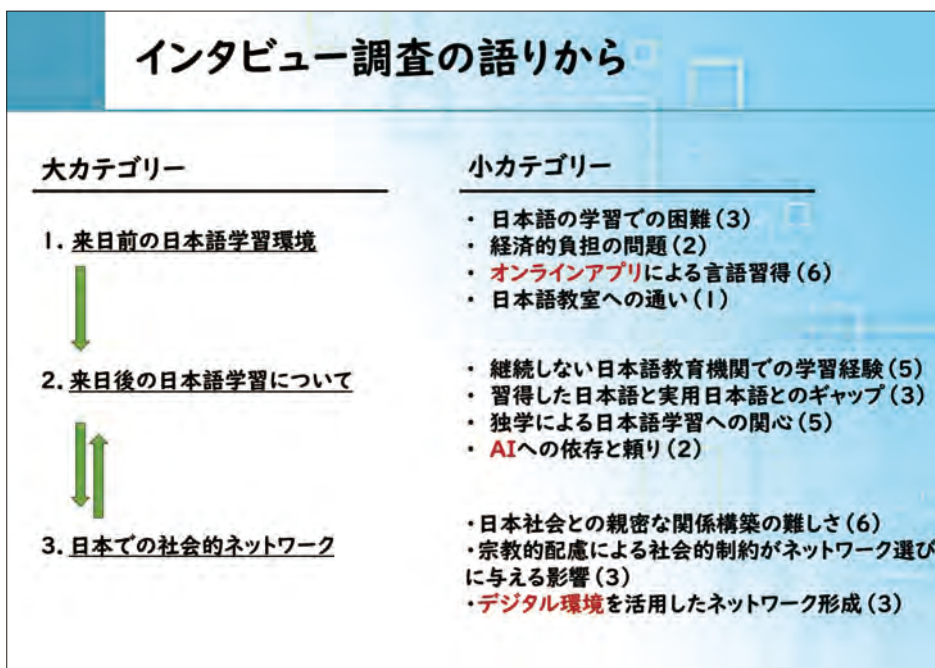
ラインアプリによる言語習得」についても、6人全員がアプリを利用しての言語習得を経験されています。「日本語教室への通い」を挙げた方も1名おられました。これが来日前です。

二つ目の「来日後の日本語学習について」は、「継続しない日本語教育機関での学習経験」といった語りが多かったです。継続されていない方は5人おられました。来日して日本語教育機関に入ったものの、なぜか継続してできないのです。あとは、習得した日本語と実用日本語とのギャップです。実際に生活してみると学校で勉強したことがあまり使えなかったというお話も半分ぐらいの方から出ていました。「独学による日本語学習への関心」を挙げた方は5人います。「AIへの依存と頼り」というAIを利用しての生活は2人が挙げています。

三つ目の「日本での社会的ネットワーク」、つまり、日本語が話せる皆さんが、日本で生活している中で、どういった社会的ネットワークを作れているのかについて伺ったところ、6人とも、日本社会との親密な関係構築は難しい、課題があると語っています。また、3人の方は宗教的配慮による社会的制約があるので、日本ではネットワーク選びが大変だといえます。デジタル環境を活用したネットワーク形成、オンラインアプリとかAIなど、デジタル環境というのが結構現在のキーワードになっていることもわかりました。

来日前の日本語学習環境が、来日後の日本語学習や日本語との向き合い方にも影響を及ぼします。どういう経験を日本語学習の中でするのかによって、日本語が引き続きうまくなるのか、それともそれ以上あまり上達しないのかにつながります。「来日後の日本語学習」の状況によって「日本での社会的ネットワーク作り」に影響があったりしますので、このあたりが関連しあっているのではないかと考えています。

それではここから具体的な語りの話に入りたいと思います。来日前の日本語学習環境で皆さんがいちばん語られていたのが、「日本語の学習環境での困難」です。



スライド 4

Im さん（スライド3の2番目）はこう語っています。彼女は医学部で勉強されていました。「学部としては医学の方が好きだったので、日本語学部に入るつもりはなかったです。あと、私は大学の時、日本語学部はもう学生はいなかったの、先生もいなかったから【内戦開始で】、もう入ることができなくなったので考えたことはなかったです。入ることはなかった」。

彼女はシリア出身の人だったので、政治的な要因で勉強したくても勉強することができないということです。

イラン出身の At さん（スライド3の6番目）は、アヤット先生のお話にもありましたが、Amazon などでの買い物はもちろんできません。

「日本語教育に関係ある教科書は Amazon とかで買えないので。おじさんに頼みました。どこか外国に行ったときに、日本の教科書をもってきてくれた。はい、でも時間がかかりましたね」

ということでした。政治的な要因、世界との国際関係の悪化は、やはり中東地域では一つの大きな壁になっていることがわかります。

An さん（スライド3の1番目）のオンラインアプリに関する語りでは、日本に来る前は UAE に住んでたので本は買えたのですが、

「授業じゃなかった。自分で本を買って、本を4冊読んで、YouTube でも動画を見て、レッスンの動画とかアプリも使いました。漢字のアプリとか暗記フラッシュカードのアプリをたくさん使いました。趣味みたいでした。～省略～ YouTube は日本に住んでいたアメリカ人のレッスンでした。その方は自分の日本語レッスンの本を出して、それとともに YouTube でたくさんのレッスンを投稿しました」

ということでした。質問があったり問題が生じたりした時は、どうしたのかを尋ねると、

「【質問は】ほぼなかったんですけど、Facebook グループで時々質問を出して答えが出るとか、HelloTalk というアプリもありました。短い間に使いました。あれは言語交換のアプリです。私は日本語を習いたい。相手はアラビア語か英語が習いたい」

というお話でした。この例のように、日本語教育機関に頼らない独自の日本語学習方法が目立ちます。

先ほど話に出た日本語教室に通っていたという1名は、モロッコ出身の Ak さん（スライド3の5番目）です。大学に日本語を教える講座があったので、週2回通っていてとても良かったという意見でした。

「16歳まではYouTube しかなかったかな。……YouTube とか見たりしていた。大学【モハメド5世大学の人文学部の】……日本語講座があるんだけど、専攻ではない。……週2回っていう頻度で、5年間ぐらいやっていました。他のモロッコ人で日本語できない人は……日常的にちょっと苦労していたと思って、やっぱりある程度日本語の基礎を学んできて良かったと思って」

それでは、来日後はどうして継続しないのかというと、詳しい事例紹介をする時間がもうないので、例えば An さんの場合、

「新宿で9月から3月まで日本語学校に通っていました。そこでの勉強が終わっ

た時、続けることはできましたんですけど、私は専門学校に入りたかったので、日本語学校を辞めました。結局専門学校も【人間関係など】が上手いかず、半年でやめました。

実は2023年で、日本橋に住んでいた時、コミュニティーセンターに何回も3回とか4回行ったけど、一番の理由は、時間が少ないとか仕事で忙しくて生活も忙しくなって暇の時間が減りました。だから、学校に行くのはあきらめました。N2もとったけど、自分で勉強した」

ということです。Yaさん（スライド3の4番目）の場合は、

「日本語学校にも通いましたが、そこはスタートのためだけ。一番日本語の勉強になったのは、Meetup（ミートアップ）のイベントに参加することでした。本での勉強が苦手だから。あとは、アプリやまあ、学校あったけど、一番勉強できたのは、あの、ゲームと映画から」

というお話で、彼もMeetupなどのイベントに参加して日本語を勉強していたそうです。

AIへの依存についてはAtさんが以下のように語っています。

「まあ、時々ちょっとチャレンジがあるけど、まあ、最近が、あの一、AIの翻訳のアプリがずっと使う、使ってるから、あんまり何か簡単にコミュニケーションできます。今は、仕事の会議でも同時に通訳してくれる。人に頼らずに自分でいろんなことができるようになったから、多くのプレッシャーが減った気がする」

AIの利用によって人的リソースへの頼りから解放されたわけです。そういうことで、やはり社会的ネットワークでもかなり日本人との接点が少なくなっています。シリア出身のHsさん（スライド3の3番目）は

「アラブの世界の場合は、年取った後に……モスクに行ったら友達に会ったりするじゃないですか。……でもそれは日本の場合はないじゃないですか。宗教的な集まりとかね、教会とかモスクとかないから。年を取ってから、友達をどこでつくればいいのか心配です」

と言っています。宗教を媒介にした自然な人間関係形成の機会が少ないわけです。

5. 考察と今後の課題

そろそろ時間となりましたので事例紹介は終わりにして、考察に移ります（スライド5・6）。

学習動機の変化をみると、最初は日本文化とかアニメに関心があるのですが、来日後は生活とか実用的な日本語への理解を深めたいと話しています。

学習手段は、最初は主に独学がやはり多かったです。来日後は、学校には通うのですが、継続しないので、「独立型の学習」へと変化していきます。最終的には、最近では人に頼らない傾向が強まっています。その背景には、日本語に関する多くの問題がAIの活用によって解決できるようになったことが大きく関わっています。

社会的ネットワークもそうです。宗教的配慮があるので、日本人と関わらない

考察

【1】学習動機の変化:

初期は文化的関心(アニメ・ゲーム等)、来日後は生活・就労・家庭に直結する実用的動機へと移行 ■実用的な日本語への理解を求めている

【2】学習手段の変化:

初期:独学(YouTube、アプリ、教科書)

来日後:日本語学校、専門学校、地域コミュニティ、イベントなどへの参加 ■継続が難しい■孤立型学習へ

最近:AI翻訳やデジタルツール(DeepL, ChatGPT)による補完

■人を頼らない解決策へ

■日本語習得への時間を他の使い方を



スライド 5

考察

【3】言語使用の多言語的環境:

家庭内での多言語の混在使用が目立つ

【4】社会的制約とネットワークの形成:

➢ 宗教的配慮(例:礼拝、飲酒を伴う交流の回避)が日本人との深い関係構築を妨げる例

➢ 対照的に、外国人・同宗教者・同国籍者とのネットワークは強固

【5】孤立型学習と多文化共生のギャップ:

➢ オンラインでの自己完結型学習の増加により、地域社会との接点が希薄に。

➢ 日本語教育が「言語」以上の「社会参加の場」として機能しなければ、多文化共生は表層的なものに留まる可能性。

スライド 6

というところです。

結論として、「多文化共生を望むのであれば、現代における日本語教育の役割は？」ということです。私がぜひ日本語学科の先生方とか日本語教育の現場で考えていただきたいのは、日本語教育機関は、言語技術だけではなくて、異文化対応・関係構築を促す「共生の場」としての役割が求められるのではないかと。ことと、学習の孤立化が今とても進んでいて、学校に行かない、行かないのでどんどん人に会わなくなっています。オンライン環境の活用は必要不可欠ですが、学習の孤立化が進めば社会的つながりを持ちにくくなるリスクもありま

今後の課題

□ 多様な出身国・背景を持つ中東出身者の比較分析

現状は一部の国・事例に偏りがあるため、イラク、シリア、モロッコ、イランなど出身国ごとの文化的・社会的背景を考慮した比較視点が必要。それぞれの在住コミュニティでどのような工夫がされているのか。コミュニティ単位で分析する。

□ 学習環境のデジタル化と孤立の問題

オンライン学習の利便性が高まる一方で、対人交流の機会が減少し、多文化共生からのギャップが懸念される。ボランティアセンターでの日本語クラスなどでも現地調査をする。

□ 地域社会との接点の創出

日本語教育が「言語の習得」だけでなく、「地域との関係構築」を支援する場として機能するための仕組み作りを検討する



スライド 7

す。対面・地域・協同活動型のアプローチとの併用が重要です。ぜひそういうところを日本語の学科で考えていけたらと思っています。

今後の課題については、スライド7にまとめました。これも皆さんと一緒に考えていけたらと思っています。ご静聴ありがとうございました。

〈参考資料〉

店田廣文（2024）『日本のムスリム人口 2024 年』多民族多世代社会研究所

ソハラブ・アフマディヤーン（2024）「在日クルド人とホスト社会の関係性：多文化共生の視点から」Studies of Language and Cultural Education 17

市嶋典子（2019）「シリア出身の日本語学習者の日本語に関する意識とシティズンシップの動態」言語文化研究第 17 巻 pp.71-87

田中ゆかり（2021）「外国人住民の「学びの場」を支える日本語教育—在日クルド人を事例に」言語文化教育研究

艾煜（2019）「在日外国人ムスリム女性の間のつながりとへだたり—東北地方の事例を通して」日本文化人類学会研究

沈雨香／アキバリ・フーリエ（2024）「ヴェールの可視性から考える在日外国人ムスリム女性の葛藤」日本に暮らすムスリム pp.96-112

森田豊子（2024）「在日ムスリム定住化までの様相—イラン人とトルコ人を比較して」日本に暮らすムスリム pp.153-166

市嶋（2019）「シリア出身の日本語学習者の日本語に関する意識とシティズンシップの動態」法務省出入国在留管理庁 2024

フリック・ウヴェエ（2011）「質的研究入門 人間の科学のための方法論」小田・三他（訳）春秋社 pp.94-121

佐藤郁哉（2008）「質的データ分析法—原理・方法・実践」新曜社

【第2部】

発表 5



在日インドネシアコミュニティと多文化共生：イスラム教育を中心に

ミヤ・ドゥイ・ロスティカ

大東文化大学

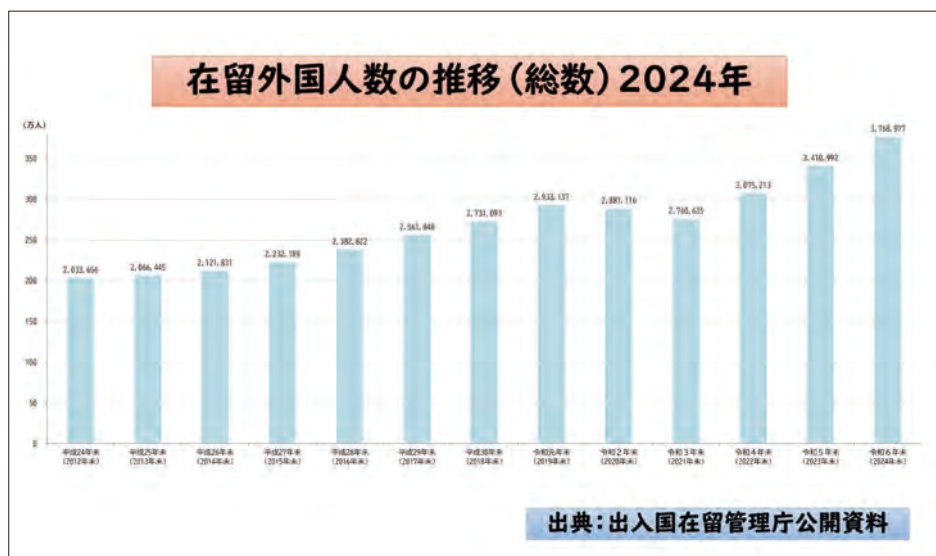
本日のテーマは「在日インドネシアコミュニティと多文化共生：イスラム教育を中心に」ですが、私の専門はインドネシアの地域研究であり、このようなテーマに取り組むのは今回が初めてです。

このテーマに関心を持った動機の一つは、私自身が大学で多文化共生について教えていることです。もう一つの動機として、私自身がムスリムコミュニティの一員であり、息子を持つ母親として、日本で生活する中でいくつかの困難を感じていることも挙げられます。

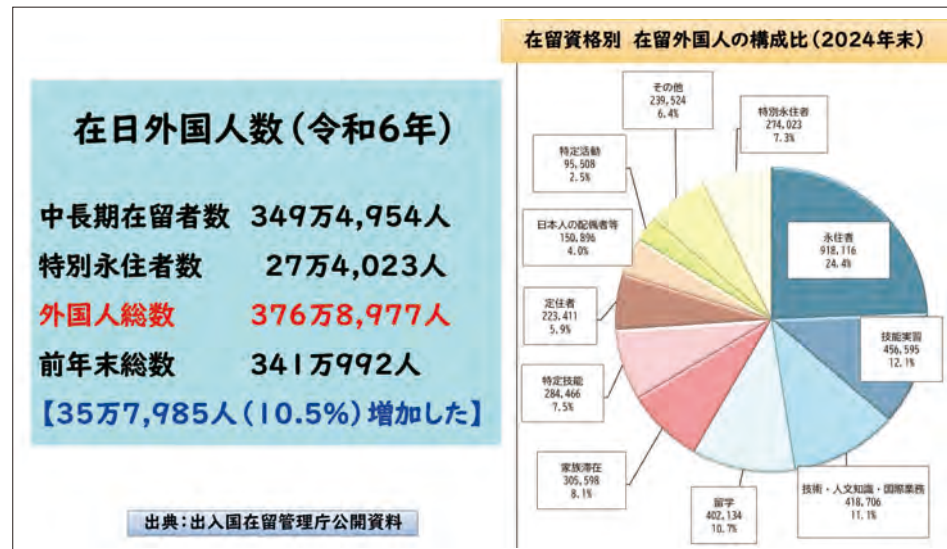
1. 日本における外国人およびムスリムの状況

それではまず、日本における外国人およびムスリムの現状についてご説明いたします。

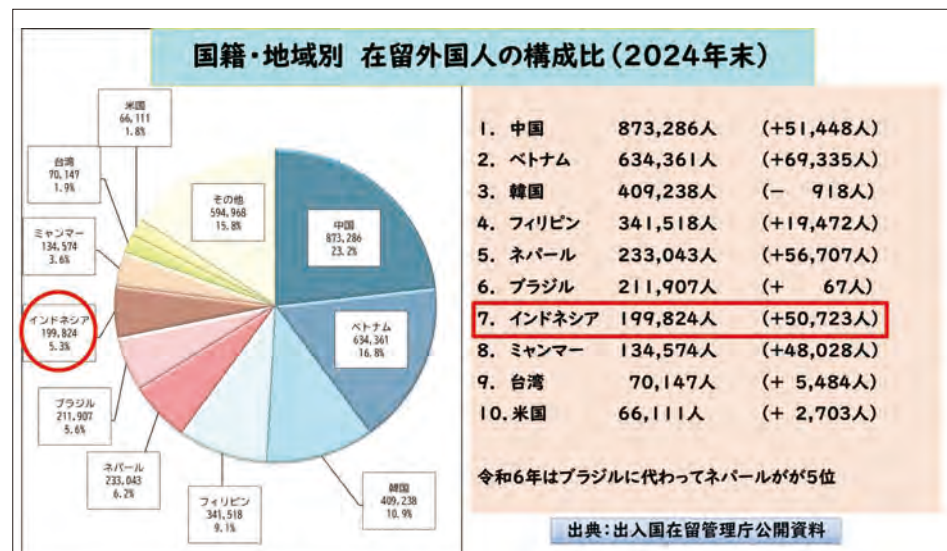
スライド1は、2024年6月までの在留外国人数の推移を示したものです。



スライド1



スライド 2



スライド 3

ご覧のとおり、外国人の人口は年々大きく増加しており、今後も減少することはないと考えられます。むしろ、これからさらに外国人の数が増えていく状況があると予測されます。

では、現在どのような方々が来日されているのかというと、仕事を目的とする方が多く見られます。また、そうした方々のご家族を伴って来日される傾向もあります。中長期で在留している外国人の数は非常に多く、現在は 349 万 4,954 人にのぼります。さらに、特別永住者を含めた外国人の総数は 376 万 8,977 人となっています(スライド 2)。

その中で、インドネシアはどのような位置づけにあるかというと、実はここ数年間、常に上位 10 か国に入っており、昨年 2024 年には第 7 位となっています(スライド 3)。

ご覧の通り、在日インドネシア人の数は、年々増加していて、2024 年は 2022

在日インドネシア人数の推移



2013年	27,214
2014年	30,210
2015年	35,910
2016年	42,850
2017年	49,982
2018年	56,346
2019年	66,860
2020年	66,832
2021年	59,820
2022年	98,865
2023年	149,101
2024年	199,824

スライド 4

年齢	男	女	合計
0～4歳	1,180	1,067	2,247
5～9歳	862	843	1,705
10～14歳	423	433	856
15～19歳	5,343	3,060	8,403
20～24歳	50,044	23,052	73,096
25～29歳	36,429	14,290	50,719
30～34歳	14,445	5,143	19,588
35～39歳	4,702	2,175	6,877
40～44歳	2,352	1,785	4,137
45～49歳	1,504	1,352	2,856
50～54歳	876	819	1,695
55～59歳	427	465	892
60～64歳	127	224	351
65～69歳	56	133	189
70～74歳	29	83	112
75～79歳	9	46	55
80歳以上	8	27	35
合計	118,816	54,997	173,813

年齢別在日インドネシア人数(2024年6月)

・働く年齢が最も多い。

→実習生、特定技能、EPA介護制度

・高齢者が少ない。

→帰国する傾向がある。

・未成年：13,211人

→家族滞在、介護士の家族、特定技能2号

出典：出入国在留管理庁公開資料より作成

スライド 5

年の倍になっています(スライド4)。

2024年6月時点の年齢別在日インドネシア人の人数を見ると、働く世代が最も多いことが分かります(スライド5)。簡単に言えば、日本に来ているインドネシア人の多くは、就労を目的として来日しているということです。働いている方々の内訳を見てみると、その多くは技能実習生、特定技能制度による就労者、そしてEPA(経済連携協定)に基づく介護制度のもとで働いている介護士の方々です。これらのカテゴリーに属する方々が、比較的多く見られます。

また、高齢者の数が少ないという点も特徴的です。これは何を意味するかというと、年齢が高くなるにつれて帰国する傾向があるということです。

高齢になっても日本に残っている方々は、主に日本人と結婚されている可能性が高いです。つまり、働くために来日している方々は、一定期間を経ていずれ帰国される傾向があることが、このデータから読み取れます。

赤で囲んだ部分は、在日インドネシア人の未成年人口を示しています。合計で1

		企業内転勤	797	在日インドネシア人 在留資格別 (2024年6月)	
教授	219	介護	1,267		
芸術	8	興行	15		
宗教	80	技能	272		
報道	3	文化活動	43		
高度専門職 1号イ	50	留学	7,203		
高度専門職 1号ロ	159	研修	104		
高度専門職 1号ハ	3	家族滞在	5,400		
高度専門職 2号	4	特定活動	5,182		
経営 管理	55	永住者	7,765		
法律 会計業務	0	日本人の配偶者等	2,535	特定技能 1号	44,298
医療	178	永住者の配偶者等	528	特定技能 2号	7
研究	65	定住者	2,769	技能実習 1号イ	771
教育	18	特別永住者	8	技能実習 1号ロ	39,231
技術 人文知識 国際業務	7,688	合計	42,418	技能実習 2号イ	657
出典:出入国在留管理庁公開資料より作成				技能実習 2号ロ	40,821
				技能実習 3号イ	29
				技能実習 3号ロ	5,581
				合計	131,395

スライド 6

在日ムスリム人口

年	ムスリム数
1969年	1,500人
1984年	5,100人
1995年	30,000～40,000人
2000年	50,000～60,000人
2006年	60,000～70,000人
2010年	100,000人
2020年	184,121人
2023年	294,385人

都道府県別ムスリム人口推移
(上位5位)

		1990年	2005年	2020年	2023年
1位	東京	11,492	19,764	30,189	38,792
2位	埼玉	2,788	10,222	22,703	28,673
3位	神奈川	2,473	9,177	16,283	21,767
4位	千葉	1,877	7,490	15,575	23,481
5位	愛知	1,326	9,443	21,920	28,359

[店田 2024]より作成

スライド 7

万 3,000 人ほどおり、これらの子どもたちは日本に居住し、日本の教育を受けている状況にあります。この点についても、皆さんにぜひ知っていただきたいと思います。

未成年者たちは「家族滞在」の在留資格で来日している子どもたちです。彼らの保護者は、日本で働いている方々や留学生、介護士、あるいは特定技能 2 号の在留資格を持つ方々です。特定技能 2 号では、家族の帯同が認められているため、子どもたちが一緒に来日しているのです。

在日インドネシア人の在留資格別データを見ると、特定技能および技能実習生の資格で来日している方は、約 13 万人にのぼります（スライド 6）。このことから、在日インドネシア人の多くが就労を目的として来日していることが分かります。左側の表には、それぞれの在留資格で来日しているインドネシア人の人数が示されており、約 4 万人となっています。

それでは、この中でムスリムの状況についてご紹介したいと思います。全体として、在日ムスリム人口は 2023 年時点で約 29 万人となっています（スライド 7）。

在日ムスリム人口上位5位（2023年末）

	国名	在留外国人数	ムスリム人口	日本人配偶者	日本人配偶者 ムスリム
1位	インドネシア	149,101	130,016	2,258	1,969
2位	バングラデシュ	27,962	24,914	510	454
3位	パキスタン	25,334	24,422	1,103	1,063
4位	フィリピン	322,046	16,424	21,895	1,117
5位	中国	821,838	14,793	25,147	456

【店田 2024】より作成

スライド 8

最も多く居住している地域は、東京、埼玉、神奈川、千葉、愛知などですが、地域別の順位は年々変化しています。

たとえば、1990年の順位は東京、埼玉、神奈川、千葉、愛知の順でしたが、2023年には東京、埼玉、愛知、千葉、神奈川の順となり、愛知県が第3位に上昇しています。これは、工場などで働くことができる人々が増えていることに伴い、ムスリム人口も増加していることを示していると考えられます。

在日ムスリム人口の上位5か国のうち、インドネシアは第1位となっています（スライド8）。つまり、日本に住むムスリムの中で、インドネシア出身者が最も多いということになります。「日本人配偶者」と記載されているのは、日本人と結婚されたインドネシア人の方々を指します。その人数は約2,200人で、そのうちムスリムの方が約1,900人と、かなり多くを占めています。

2. 宗教アイデンティティの形成と 在日インドネシア人家庭がかかえる問題

次に、なぜインドネシア人が宗教を大切にしているのか、インドネシアにおける宗教アイデンティティの形成という点についてご説明したいと思います。

まず1点目として、インドネシアは政教分離の原則を採用しているものの、少し特殊な形をとっています。インドネシアの「建国五原則（パンチャシラ）」の中には、「唯一の神への信仰」が掲げられており、国家として宗教の重要性を明確に示しています。そのため、国民は政府が認める宗教のいずれかを信仰することが求められています。

2点目として、インドネシアでは日本と異なり、正式な学校教育の中に宗教の授業が組み込まれています。インドネシアには主に2種類の学校があり、ひとつは国立の一般学校（Sekolah）です。この一般学校では、週に1～2回、宗教の

授業が行われています。私が通っていた頃は週1回でしたが、現在では週2回実施している学校もあるようです。

もうひとつの学校が宗教学校（Madrasah）です。宗教学校は教育省の管轄ではなく、宗教省の管轄下にあります。この宗教学校では、宗教に関する授業時間が多く設定されています。ちなみに、私自身も宗教高校の出身で、コーランの学習、アラビア語、イスラム法などの授業が週に6コマほどあったと記憶しています。やはり、宗教系の学校に進学すればするほど、宗教の授業時間が増えるという環境にあると言えるでしょう。

また、イスラム寄宿学校（Pesantren）という形態の学校もあります。これは、学生が寮に住みながら学ぶ形式で、宗教学校の内容に加えて、寮生活のすべてのルールに宗教的価値観が反映されています。つまり、日常生活そのものの中に宗教が深く根付いていることが分かります。

3点目に、インフォーマルな宗教教育があります。インドネシアでは、私自身の経験からも言えることですが、家庭内で宗教教育が行われています。基礎的な教育は父母によって行われますが、経済的に余裕のある家庭では、家庭教師を招いてコーランの読み書きを教えることもあります。

また、財政的な余裕がなくても、宗教の学びは可能です。特に村では、小さい頃から地域のモスクに通い、イスラム教の学習——たとえばコーランの朗読や礼拝など——を行います。これらの活動は、主に夕方6時から8時頃に行われ、子どもたちは仲間とともに楽しく宗教を学んでいます。このように、インドネシアでは宗教が生活の一部として根付いており、日常の中で自然と宗教的価値観が浸透していく環境が整っています。

では、日本に渡り、このような宗教的環境が整っていない中で、人々はどのように対応しているのでしょうか。ここからは、在日インドネシア人ムスリム家庭が抱える課題について考察していきます。

まず第一に、「日本の学校における宗教への配慮」が大きな問題となっています。給食、断食、お祈り、他宗教に関する学校行事など、宗教的な配慮の有無は学校によって大きく異なります。配慮がある学校もあれば、まったく対応されないケースも報告されています。

たとえば、クリスマス行事への参加については、ムスリム家庭の子どもが参加できない場合もあり、そうした子どもへの配慮が求められます。しかし、宗教的背景を知らない教師が参加を強制しようとすると、保護者との間で摩擦が生じ、さまざまな問題が発生します。本来であれば、宗教に関する基本的な知識が必要ですが、日本では政教分離の原則があるため、学校ごとの対応がまちまちで、宗教的配慮が十分に行われないことが課題となっています。

第二に、非ムスリムが多数を占める環境の中で、ムスリムとしてのアイデンティティをどのように形成していくかも重要な問題です。これは私自身も経験していることです。私には息子がいますが、彼にムスリムとしての自覚をどのように持たせるかについて、非常に悩んできました。

私は家庭で一般的な宗教教育を少し行っている程度ですが、イスラム教の勉強会に積極的に参加させている保護者もいます。これは非常に良い取り組みですが、

会場が遠方であるため、週に1回しか通えないという現実があります。その結果、宗教教育がどうしても不十分になってしまうのです。こうした背景から、子どもを宗教学校に通わせる家庭が増えている状況です。

先行研究としては、名古屋大学の服部美奈氏による「インドネシアのムスリムコミュニティについて」や、店田廣文氏の「日本のムスリム人口」、大橋充人氏の「在日ムスリムの声を聴く」などが挙げられます。ただし、インドネシア人ムスリムに特化した研究は非常に少ないのが現状です。

3. 在日インドネシアムスリム家庭へのインタビュー調査

私は今回の発表に向けて、急遽インタビュー調査を実施しました。ここからは、具体的な事例をご紹介します。

インタビュー対象者の条件として、まず第一に、異なる背景を持つ5人の母親を選定しました。母親を対象とした理由は、やはり母親が最も子どものそばにいる存在であるからです。父親は仕事に出ていることが多く、日常的に子どもの世話をするのは母親であるため、子どもと過ごす時間が最も長いと判断し、母親へのインタビューを行いました。

第二の条件は、子どもを宗教学校に通わせている方であることです。

第三の条件は、東京都、千葉県、神奈川県、埼玉県といった、ムスリムが比較的多く居住している地域に住んでいる方を対象としたことです。

今回のリサーチクエストは非常にシンプルで、主に以下の3点に焦点を当てています。

「日本において、どのように宗教教育を実施しているか」

「なぜ子どもを宗教学校に入学させたのか」

「宗教教育において、どのような困難に直面しているか」

インタビューを行った5名の方々は、それぞれ記号でA～Fとして表示しており、その詳細はスライド9の表にまとめています。

まず、Aさんは家族滞在で夫とともに来日し、その後、留学生として博士課程に進学した女性です。職業は博士課程の学生であり、Aさんも夫も日本語を話すことができません。Aさんは来日後、公民館で約1年間、週に数回日本語を学んでいましたが、夫はまったく日本語を勉強していません。そのため、Aさんの家庭では日本語に関する課題を抱えています。

Aさんが選択した学校は「国際イスラム学校」です。子どもは2人いますが、通わせているのは長男のみで、家庭内での言語は英語です。つまり、インドネシア語ではなく、英語を優先的に教えている状況です。学費は年間約50万円です。

将来的に息子をどのような学校に進学させたいかという質問に対して、Aさんは「イスラム性」よりも「国際性」を重視していると答えています。これは、日常的なコミュニケーションが日本語ではなく英語で行われていることが背景にあるからです。

	A	B	C	D	E
背景・来日年	家族滞在→留学 (2020)	日系3世(1995)	日本人と結婚 (2001)	留学→日本人と結婚 (2007)	留学→結婚 (2005)
日本語	公民館(1年) 問題あり	公民館 主人の日本語問題あり	日本語学校	大学	日本語学校、大学
職業	博士課程学生	通訳・ガイド	日本語の先生、通訳	レストラン・ハラル 店経営者	大使館のスタッフ
学校選択	国際イスラム学校	日本校→インドネシア のイスラム寄宿校 (高1~)	国際イスラム学校 (中1~) 主人に反対	国際イスラム学校 (小3年~、幼稚園 ~)	国際イスラム学校 (中1~) →日本の高校
子ども数	2人(長男)	5人(長女)	1人	5人(長男、次男、長 女、次女の4人)	3人(長女)
子どもの言語	英語	日本語	日本語	日本語 (娘:英語・日本語)	日本語
学費(円)	50万/年	18万/年	72万/年	90万/年	110万/年
進学・希望	国際イスラム学校 (予定)	インドネシアの大学・ カイロの大学(予定)	日本の大学	子共次第	日本の大学 (予定)

スライド 9

Bさんは日系3世で、母親に日本人のルーツを持つ方です。Bさん自身も、来日当初は日本語を話すことができませんでした。夫も日本語は話せません。Bさんが選択した学校は少し特殊で、子どもをインドネシアのイスラム寄宿学校に通わせています。つまり、子どもはインドネシアに滞在しており、Bさん夫妻は日本に住みながら、遠隔で子育てをしている状況です。

Cさんは日本人と結婚し、来日後に日本語学校で日本語を学びました。現在は、日本語教師および通訳として働いています。Cさんの事例が特殊なのは、日本人の夫が子どもをイスラム系の学校に通わせることに反対していたことです。Cさんは夫の反対を受けながらも、子どもをイスラム教学校に通わせる許可を得るために、土下座までして説得しました。

ただし、夫は「学費は負担しない」という条件を提示しており、Cさん自身が年間72万円の学費を一生懸命支払っている状況です。

Dさんは、留学を経て日本人と結婚した高学歴の方で、日本語にも問題はありません。現在はハラルショップとハラルレストランを経営しており、5人の子どものうち4人を国際イスラム学校に通わせています。学費は1人あたり年間約90万円かかります。

Eさんは、留学後にインドネシア人と結婚した方で、大使館のスタッフとして勤務しています。Eさんは中学校から子どもを国際イスラム学校に通わせていましたが、高校は日本の高校を選びました。その理由に注目したいと思います。

それぞれの家庭における宗教教育については、スライド10に示したように多様ですが、簡潔にまとめると、「家庭での宗教教育は子どもの宗教的アイデンティティの形成に一定の効果があるものの、それだけでは不十分である」ということが明らかになりました。

次に、「イスラム学校への入学動機」についてですが、スライド11・12にすべて記載しています。主な動機としては、子どもをイスラム的な環境に慣れさせたいという思いや、子どもが宗教に関して疑問を持ち始めたものの、親自身が十分

家庭での宗教教育

- A** ・ 実践を見せる。例：お祈り、ハラール料理、イスラムの物語から学ばせる。
 ・ モスクでコーラン朗読を学ばせた（週1）。ゲーム、キャンプも行われた。
 ・ コロナの際、家族全員はオンラインのコーラン朗読をカイロ在住のインドネシア人の先生から学んだ（週一回）。
B 長女は自主的にヒジャブを着用し、次男もお祈りの仕方も分かるようになり、次女もアラビア文字が読めるようになった。
C ・ 幼稚園からイスラムの基礎教育（断食、お祈り、アラビア文字）
D ・ イスラムの基礎教育（強制しない）
 ・ 宗教の基礎教育
E ・ オンラインコーラン朗読（インドネシアの先生による）→長女は週3、次女は毎日インドネシア語の学習を兼ねて、あえてインドネシアの先生を選んだ。

家庭の宗教教育は効果的だが、それでも不十分

スライド 10

イスラム学校入学の動機

- A** ・ イスラムの環境に慣れさせたい。
 ・ ムスリムの友達の存在が重要で、友達に誘われることで宗教的行動を実践するようになった。
 ・ 小学校の時に、子供は母に短いスカート禁止されたことに疑問を持ち始めた。
 ・ 男女関係に関する動画を友達の携帯で見て、その後母の携帯で見た。
B ・ 友達にイスラム教に係る授業が出た時に友達に質問攻めにされた。
 「アラビア語できるか」、「できないならなぜイスラムを信仰しているか」、
 「なぜ断食やお祈りするか」などという質問。→（本人はいじめと認識）子供は答えられなかったため、インドネシアの寄宿学校に行きたい決め手となった。
 ・ 自分自身、イスラムを学ぶことで心が落ち着くと感じた。その感覚を、子どもにも経験してほしい。
C ・ 子どもにイスラムを教える自信がないため、学校に教育を任せたい。
 ・ 子どもにはイスラムについて理解を深めてほしい。
 入学を決める前に、最初はAfter school class 週3（1年間）通っていた。

スライド 11

- D** ・ 長男は小学校の時にいじめを受けた。（本人が自分で目撃した）
 ・ 親に対する言葉遣いが荒くなった。
 ・ アカデミックよりも、子どものイスラム的価値観の形成を優先する
 ・ 子どもが幼いうちに、良い性格（イスラム的）を育てたい。
 ・ 自分では宗教を十分に教えられないため、学校に任せたい。
 ・ 日本とインドネシアの国際結婚家庭に育つ子どもたちが、ムスリムとしてのアイデンティティから離れていく様子を実際に見てきた。
 ・ ムスリムコミュニティ内で成功事例を参考にした。
 ・ ムスリムとしてのアイデンティティ形成。
 ・ ムスリムの友人を持つことを望んでいる。
E ・ 日本の若者の習慣や交友関係に懸念があった。
 ・ インドネシアの学校も検討したが、子どもを一人で通わせることには不安があった。

スライド 12

に答えられないため、学校に教育を委ねたいという理由が挙げられます。また、子どもにイスラムについてしっかりと理解してほしいという願いや、日本人の若者との関係性に不安を感じているため、イスラム的な環境の中で育てたいという考えも、入学の動機となっています。

つまり、共通する入学動機として、第一に「ムスリムの友人がいる環境を求めていること」が挙げられます。第二に、日本の若者の生活習慣とイスラム教の価値観との違いに対する懸念があります。子どもが非イスラム的な価値観に影響されることへの不安を抱いているのです。特に思春期の子どもを持つ母親にとっては、娘の成長過程における価値観の形成に対して、心配があるのではないかと考えられます。第三に、イスラム教徒としてのアイデンティティの形成を重視している点も、重要な動機の一つです。

一方で、「イスラム学校の欠点は何か」という質問に対するまとめは、スライド13～15に示したとおりです。共通して挙げられるのは、言語に関する問題です。日本語から突然英語での教育に切り替わるため、英語についていけず、授業の内容が理解できなくなり、結果として成績が下がるという悪循環が生じています。

次に、学費の高さと、学割定期券が使えないことによる交通費の負担が挙げられます。国際宗教学校は国の認可を受けていないため、通学定期券の対象外となり、交通費が非常に高額になるのです。

また、イスラム学校は、日本の一般的な学校と比べて設備面で劣る場合があります。しかし、保護者たちはこれらの欠点を理解した上で、それでも子どもを通わせたいと考えています。

では、実際にイスラム学校に通わせたものの、途中で退学を選んだ保護者の理由についてですが、主な要因は学力の問題です。

日本の学校と宗教系の国際学校では授業内容が大きく異なるため、日本の大学受験に対応するのが非常に難しいのです。受験を視野に入れる場合、イスラム学校は不向きであり、相当な努力が必要になります。今回のEさんに対する調査では、実際に受験を経験したCさんのお子さんの事例を参考に、イスラム学校を辞めて日本の高校への進学を決めたことが分かりました。

それでは最後に、ムスリム家庭における宗教教育の選択とその限界についてまとめます。

一つ目は、宗教教育と学力・進学の両立が困難であるという点です。イスラム学校はイスラム教徒としてのアイデンティティ形成には貢献していますが、授業やカリキュラムは日本の学校と異なるため、学力の低下や日本の大学への進学に対する不安が生じています。

二つ目は、経済的な負担が保護者に集中しているという点です。国からの学費補助や学生定期券の認定が受けられないため、保護者の負担は非常に大きくなっています。

三つ目は、日本社会における代替的な選択肢の不足です。言い換えれば、多様性を受け入れる学校が増えることで、こうした問題はある程度緩和される可能性があると考えられます。

イスラム学校の欠点

A

- ・ 学校設備や運営体制において、日本の学校との違いがあった。
- ・ 教員の人数が限られている。
- ・ 運営面での整備が不十分。例：行事の予定が事前に共有されないことがある。
- ・ インドネシアの家族に迷惑をかけていると感じている。

B

- ・ インドネシア語や、PPKN（国民教育）・歴史などインドネシア特有の科目に苦勞している。

C

- ・ 日本語能力の低下が見られる。
- ・ 授業内容が日本の高校と異なるため、日本の大学受験に必要な学力が不足している。
- ・ 進学準備の過程で、子どもが体調を崩すほど大きな負担がかかっている学費が高額。（夫が反対しているため、学費は母親が負担している）
- ・ 交通費も高額。そのため、毎日車で送迎した。

スライド 13

① 言語の壁と学習の困難

- ・ 長男は英語ができず、入学当初は授業についていけなかった。

② 送迎と費用の負担

- ・ 幼稚園児の送迎が必要。現在は日本にいる兄弟が交代で対応。
- ・ 交通費の負担が大きい（定期券がない）
- ・ 学費が高額

D

③ 学校活動と文化の違い

- ・ 部活動がないため、夫（日本の学校出身）は当初反対していた。夫にとって部活動は大切な思い出だった。
- ・ 日本の学校では礼儀や規律を重視する。
- ・ 日本の学校と異なって、宗教学校では運営が緩やか。

例：行事のスケジュールが事前に決まらず、急に通知されることが多い。

スライド 14

① 言語の壁と学習面の問題

- ・ 英語ができなかったため、授業についていくのが困難だった。
- ・ 学力が低下し、成績にも影響が出た。

② 学校運営と設備面の課題

- ・ 学校のスケジュールが事前に決まっておらず、運営が不明瞭。
- ・ スポーツ施設などが不十分で、活動の選択肢が限られている。

イスラム学校を辞めた理由

E

- ・ 子どもが日本の大学への進学を希望しており、受験準備が必要だった
- ・ イスラム学校に通う生徒の受験の大変さを、子ども自身が目の当たりにした。
- ・ 学校が遠く、通学に時間がかかるため、勉強時間の確保が難しかった。
- ・ 学費と交通費が高く、塾との併用により経済的負担がさらに大きくなった。
- ・ 自宅近くにグローバル高校（進学校）があり、ヒジャブを着用する生徒や留学生も多く在籍していた。
- この高校に入学できれば、イスラム学校を辞めると判断する。
- ・ 母親はその高校についてリサーチを行い、帰宅する生徒たちの会話や様子を観察して最終的な判断を下した。

スライド 15

ムスリム家庭の教育選択は、「信仰」「学力」「日本社会との共生」という三つの要素のバランスの中で揺れ動いています。日本社会全体がこの状況を理解し、包括的で寛容な教育環境を整備することが、共生社会の実現に向けた第一歩となるのではないかと考えます。

今後の課題としては、以下の点が挙げられます。

- 日本に暮らすムスリム家庭の教育選択とその背景要因を、より深く研究し明らかにすること
- 子どもたちの宗教的アイデンティティ形成に影響を与える学校や社会の要因を分析すること
- 今後の教育や地域支援のあり方について検討すること

以上で発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

第2部【討論・質疑応答】

日本の国際化の中の
外国人コミュニティを再考察する

司会：シェッダーディ アキル（慶應義塾大学）

オンラインQ&A：岩田 和馬（東京外国語大学）

指定討論者： ゲンチェル・バルオール・ゼイネップ（パムッカレ大学（PAU））
チャクル・ムラット（関西外国語大学）討論者： レベント・トクソズ（テキルダール・ナムク・ケマル大学（NKU））
チェリッキ・メレキ（チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学（COMU））
アヤット・ホセイニ（テヘラン大学）
アキバリ・フーリエ（神田外国語大学）
ミヤ・ドゥイ・ロステイカ（大東文化大学）

アキル それでは討論セッションに移らせていただきます。討論セッションのあとに質疑応答セッションを行いますので、オンラインでご参加の方はQ & A機能を使ってご質問ください。

指定討論者はパムッカレ大学のゲンチェル・ゼイネップ先生と関西外国語大学のチャクル・ムラット先生です。どうぞよろしくお願いします。

ムラット ご発表ありがとうございました。お伺いしたいことは山ほどあるのですが、傾向としてはイスラムコミュニティ自体に問題が発生してるということですね。日本の方から問題を取り上げることは少ないと感じました。日本語学習に関しては、日本人でさえ義務教育の9年間をかけてやっとすべての常用漢字を学び、読み書きできるようになるのです。まして、日本に来て日本の学習を習得しようとする外国人にとってはかなり時間がかかる問題ですし、日本語にはひらがな、カタカナ、漢字、ローマ字、そして日本の大学では「(空気)を読む」という、文

章に書かれていないことを読み取る授業もあるらしいですね。私たちの時代はありませんでしたので、受講してみたかったですね。

まず、アキバリ先生の日本の文化の需要と日本語教育の件ですが、日本語ができるからといって共生できるかというところでもないとおっしゃっていましたが、結果として統合政策になるところに問題があるのではないかと私は考えてます。なぜかという、日本には移民という概念も、外国人という言葉の概念もありません。日本の考え方自体に統合というか、共生に関係するものが少ないのです。残念ながらまだ日本は「共生」することへの課題を抱えているという印象があります。

それからご発表では成人の日本語習得過程、成人になってから日本語を習得した方のお話が主でしたが、もっと若い人たちの場合はどうなのかが気になりました。また、継続的な時間が必要というところでは、どれくらいあれば十分な日本語ができるようになるのかということも問題だと考えられます。ですから、この面での日本語学習に対する国の支援みたいなものが一体どうなっているのかと思いました。これはムスリムであるかどうかは関係なく、外国人と呼ばれる人全員に対して言えることだと思っています。

2番目のミヤ先生のご発表については、その内容に驚きました。こんなにイスラムに根付いたムスリムの教育というものがあるのだと思いました。よく考えてみれば同じ宗教とはいえ、やり方は様々だということがよくわかります。残念ながら日本でも欧米でもおそらくイスラム教に対する恐怖のようなものがあるのかもしれないのですが、いっしょくたにされていることが1番問題ではないかと思います。なぜかという、イスラム圏とはいえ、歴史、文化、そして生活習慣はそれぞれ違うので、価値観が違うのは当たり前です。

当たり前ですが、例えば私が今ミヤ先生の発表を聞いて思うのは、子どもが親にだいたい制限されているのだということです。親の強制的な意向が子どもに影響しているようですが、その子どもが将来どの社会で生きていきたいのかというところがポイントではないかと思います。例えば日本で働きたいのなら、日本語が話せるだけでは難しく、やはり読み書きの力が求められます。読み書きができないとやっていけません。そしてお金と時間と労力の問題ですね。自分の国と同じ環境を求めると、結局共生というものの問題は、ムスリム・コミュニティ自身の問題になって、そこから政策的に語りかけようとしてもそうはならない面があるのではないかと考えました。

あとは宗教についての質問ですが、インドネシアでは宗教を指定しているんですね。政府が公式に認めているのは何の宗教で、いくつありますか？

■ ミヤ イスラム教、キリスト教（プロテスタント、カトリック）、ヒンドゥー教、仏教、儒教の6つです。

■ ムラット 儒教もですか。そんなに宗教的な背景への多様性を持っている国なのですね。それは興味深いです。私のご発表に対する意見と疑問は以上です。よろしくお願いします。

■ ゲンチェル アキバリ先生は中東出身者が日本に来る前の日本語教育文化と来日してからの日本語教育環境についてお話しされましたが、これはとても面白いテーマだと感じました。たとえばトルコで日本語を授業として教えるとなると、まず教科書選びで迷います。というのも、よく知られている『みんなの日本語』は、基本的に日本国内で学ぶ人向けに作られているからです。トルコで日本語を学ぶ場合、日本文化に直接触れる機会って多くないですよね。しかも、日本国外での指導を想定した教材でも、日本文化への触れ方は思ったほど多くないように感じました。日本の方は自分たちの文化をあまり前面に出さない、そんな印象もあります。

私は教科書に文化的な要素をどれくらい入れるべきか、それが興味深いところだと思います。日本語を独学で学ぶ場合は、どれくらい勉強するか、何を勉強するかを自分で決めることができますが、教室という環境で習う場合、文化的な要素がどれくらい入ってるかどうか、1番大切なものだと思います。

次に、ミヤ先生の発表は、日本のムスリム・コミュニティにおける宗教教育の課題についてでした。お話をうかがって、「かなり進んでいるな」という印象を受けました。私たちのコミュニティでは、以前は埋葬する場所（お墓）でさえ十分でない時期があったので、私立とはいえ宗教教育を受けられる機会があるのは大きな前進だと感じました。

疑問に思ったこともいくつかありますので、よろしければお答えください。国際イスラム学校のカリキュラムとか学校の規則とかは内務省なのか文部科学省なのか、どこで作られているのでしょうか。また、監督する組織はあるのでしょうか。また、例えばトルコの場合、イスラム教徒でなければ宗教の授業は選択しなくてもいいのですが、日本には宗教の授業の代わりに道徳の授業がありますよね。でも、道徳の教科書にはおそらくいろいろな宗教、キリスト教や仏教などの要素が入っていることもあります。その道徳の授業を自分の子どもに受けさせたくないという場合、受けさせなくても大丈夫ですか。そういう規則はどうやって決められていますか。教えていただければと思います。

■ ミヤ まず、ムラット先生からのご質問にお答えいたします。「子どもに対する制限とは、具体的にどのようなものか」というご質問でしたね。

私はムスリムとしての立場からお話しできますが、子どもの教育は基本的に親の責任です。宗教教育もその一環であり、多くの親が「小さい頃から教えなければならぬ」と考えているのではないかと思います。

ただし、宗教教育を「強制」してしまうと、子どもはかえって拒否反応を示すことがあります。イスラム教に対して嫌悪感を抱いてしまう可能性があることは、多くの家庭で理解されています。そのため、どの家庭でも宗教教育は無理なく、ゆっくりと進めていく傾向があります。

例えば、「今年は断食を始めてみようね」といった声かけから始めていきます。私自身も、息子に対してそのように実践しました。最初は小学校3年生のときに、半日断食から始めました。「12時から日没まで食べないようにしてみよう」といった形で、少しずつ体験させていきました。

4年生になると、「じゃあ、今年は土日だけ1日断食してみようか」と、段階

的に進めていきます。そして6年生になる頃には、1日断食ができるようになります。それができたら、「よく頑張ったね」「ご褒美をあげよう」といった形で褒めてあげます。

私の場合は、この方法でうまくいきました。ただ、他のご家庭ではまた違ったやり方をされていると思いますし、さまざまな方法があるのだと思います。いずれにしても、こうした形で、家庭教育はゆっくりと進めていくものだと感じています。

先ほどの発表で、私が家庭教育について「効果的」という言葉を使ったのは、こうしたやり方を指してのことです。子どもが納得し、徐々に「イスラム教の学校に通ってみてもいいかな」と、自ら思えるようになっていくのです。

先ほどは時間の都合で、発表の最後が少し急ぎ足になってしまい、十分にお伝えできなかった点がありました。実は今回の調査では、「最終的に親はどのような判断をするのか」という質問も含まれていました。その結果、回答のほとんどが「子ども次第です」というものでした。つまり、子どもがどこで、どのように生きていきたいかという希望を前提に、親が判断を下すということです。ただし、私自身は、それまでに親が教育者としての役割をしっかりと果たしているからこそ、そうした判断が可能になるのだと考えています。

ムスリム的な教育が施されていると、子どもの人格も少しずつ変化していきます。実際に「優しくなりました」というお話を今回のインタビューで伺いました。

Eさんのお子さんの例ですが、以前は母親に暴言を吐くようになってしまったそうです。母親は危機感を感じ、宗教学校に通わせることを決めました。その後どうなったかを伺うと、彼は優しい男の子に変わったそうです。宗教学校への進学に反対していた父親も、その変化を見て「いい子になったのだから、宗教学校を続けてもよいのではないか」と考えるようになったそうです。

確かに、子どもに対して一定の制限を加えるという側面がまったくないとは言えません。しかし、最終的には子ども自身が納得し、受け入れているのではないかと私は思います。

実際、私の息子もこれまで一度も「嫌だ」と言ったことはありません。たとえば、なぜ豚肉を食べてはいけないのかということも、小さい頃から丁寧に教えてきましたので、自然と素直に受け入れています。

ゲンチェル先生からのご質問は、学校制度に関するものでしたが、非常に良いご質問だったと思います。ただ、私自身はまだ学校制度に関する詳細な調査までは行っておらず、どの機関が管轄しているのかなどについては、今後調べていきたいと考えています。現時点で分かっていることとしては、国際イスラム学校は日本の学校制度における認定がされていないという点です。

例えば、一般的な高校であれば、大学進学の際に学校推薦を受けることが可能ですが、国際イスラム学校ではそれができません。したがって、大学に進学するには、受験という方法しか選択肢がありません。さらに、日本の大学を受験するためには、そもそも授業内容が大きく異なっているという課題があります。国際イスラム学校では宗教の学習が含まれていたり、授業が英語で行われていたり、単位制の授業形式が採用されているそうです。これは、日本の授業の進め方や重

視される内容とは大きく異なります。

そのため、国際イスラム学校に通っていた子どもたちが日本の大学に進学しようとする場合、非常に困難な状況に直面します。まるでゼロから学び直さなければならないような状況になるのです。

実際に受験を経験した方の母親（Cさん）にインタビューを行いました。Cさんのお子さんは、日本から離れたくない、ずっと日本にいたい、日本の大学に進学したいという強い思いから、体調を崩すほど努力を重ね、最終的にある大学に合格しました。

先ほどの発表でも触れたように、国際イスラム学校への通学を途中でやめた家庭（Eさん）の事例がありましたが、その理由のひとつが、受験したCさんのお子さんの姿を見たことだったそうです。体調を崩すまで苦労している先輩の姿を見て、「自分も受験したいけれど、あのようにはなりたくない。だったら、日本の高校に進学すべきではないか」と、Eさんのお子さん自身が考えるようになったのです。

その思いを親に伝えたところ、Eさんは納得し、どの高校に通わせるべきかをリサーチしたそうです。結果として、留学生が多く、ムスリムの生徒がヒジャブを着用しているなど、多様性に富んだグローバルな高校を見つけました。

さらに、実際の学校の様子についても丁寧に情報を集めた結果、その子は無事にその高校に入学することができました。

■ アキル ありがとうございます。それでは、質疑応答に入りたいと思います。午前の部の先生方も午後の部の先生方もみなさん前へお越しください。

質疑応答

■ 岩田 では、最初に午前の部の先生方への質問から伺いたいと思います。まずレベント先生に質問です。「ご自身は日本語のカタカナ英語をどうお考えですか。トルコ語で外国語をトルコ語としてご使用になることに対してどうお考えでしょうか」とのことです。いかがでしょうか。

■ レベント 外来語についての個人的な話になりますが、私も学生時代どちらかというと日本語の中にある外来語は苦手でした。今でもカタカナは音声として私には少し難しく感じます。外来語は英語そのもので考えればある程度書けるのですが、外来語をカタカナ表記で日本の音声に合わせてようとすると、今でも混乱してしまいます。

■ 岩田 ありがとうございます。次はメレキ先生にご質問があります。これはひょっとしたらアキバリ先生のご発表で、ある程度答えも出たように思いますが、「ア

ニメやマンガをきっかけに日本語学習を始めた大学生たちは、日本語の学習が進んでもアニメやマンガに興味を持ち続けるのでしょうか。それとも興味は減っていくのでしょうか」というご質問です。

■ **メレキ** まず会場で参加されている学生の皆さんに伺いましょう。最初はマンガやアニメが好きで日本語学科に入ってきて、今も好きな方はいらっしゃいますか？ はい、いらっしゃいますね。私が担当している学科にもそういう方が5～6人いて、だいたい続くようですね。30代後半になっても続いているようです。こんな回答で大丈夫でしょうか。

■ **アキバリ** ちょうどこの質問に関連するのでよろしいでしょうか。アニメとマンガに興味があつて日本に来られて、今はマンガ家になっている方、マンガを描いてオンラインで出版している方、あとはゲームの会社に入っている方もいらっしゃるなど、そのままずっとマンガに興味を持ち続けている人もいらっしゃいます。

■ **岩田** それでは続いてアヤット先生に質問が一つ来ています。「トルコの学習者はアニメやマンガに関心があると伺いましたが、イランの学習者は日本のどのようなことに関心を持っていますか」というご質問です。

■ **アヤット** やはりトルコと同じで、昨日の交流会でトルコの学生の皆さんとお話していて、うちの学生と非常に似ていることに気づきました。考え方、見ていること、やっていること等々、やはりみんな日本の文化に興味があつて、日本という国が好きで、見ているアニメもドラマも聞いている音楽などもすごく似ています。イランの学生も子どものときからいろいろなアニメなどを見ながら日本語を勉強したいと決心したということが最近多いですね。

メレキ先生のご発表にいろいろな日本のアニメのタイトルが出てきましたが、やはり同じようなアニメをイランの学生たちも見ています。答えになりましたでしょうか。以上です。

■ **岩田** ありがとうございます。では、午後のセッションへの質問もいくつかしておりますので、ご紹介していきたいと思います。これはアキバリ先生へのご質問だと思いますが、「継続しない日本語教育機関での学習経験のお話がありましたが、ご本人は日本語教育機関で日本語学習をすることは希望されているということでしょうか」という質問をいただいております。

■ **アキバリ** そうですね。最初はみなさん日本語学校とかコミュニティセンターのボランティアクラスなどを探して行くのですが、時間が合わないとか、時間数が少ないとか、あとはお金がかかることなども継続しない理由になっています。あとはボランティアのクラスなどでは年配の方が担当しているケースもあつて、続けたいと思えるほどの魅力を感じないからという話もありました。今は日本語を教えている YouTuber の方もたくさんいますし、独学できるアプリもあります。それ

を利用すれば、自分の好きな時間に日本語が勉強できるとか、好きなテーマを自分でもっと深掘りして勉強できるといった状況ですので、日本語教育機関から離れてしまっています。今後日本語教育機関の役割はどうなっていくのかなというところです。

岩田 ありがとうございました。もう一つミヤ先生に質問が来ております。「日本の国際イスラム学校では英語で学習するのであれば、国際イスラム学校に通うインドネシアの子どもたちは、インドネシア語や日本語をどこで学ぶのでしょうか」という質問です。

ミヤ スライド9 (p55) の「子どもの言語」の項目にも記載したとおり、調査対象の子どもたちの第1言語は、ほぼ日本語でした。第1言語が英語である子は1人だけでした。つまり、インドネシア人の家庭で家庭内ではインドネシア語を話していたとしても、「子どもの言語は？」と質問すると、多くの場合「日本語」と答えるのです。子どもが最も得意とする言語が日本語である、ということがわかりました。

逆に言えば、英語は得意ではないため、国際イスラム学校に入学すると英語に関する困難が生じます。調査を進める中で明らかになったのは、国際イスラム学校に入った子どもは、1年目はほとんど何もできない状態であるということです。2年目になってようやく慣れ始め、3年目になると「楽しい」と感じるようになる、という流れが見られました。ただし、幼稚園の段階から国際学校に通わせた場合、第1言語は日本語から英語へと徐々にシフトしていきます。国際学校の幼稚園では、日常生活のすべてが英語で行われるため、家庭に帰ってくると日本語と英語が混ざった言語で話すようになるそうです。

インドネシア語の学習については、オンラインで学習している家庭もあれば、インドネシア人を雇って宗教教育をインドネシア語で行うという、一石二鳥の方法を取っている家庭も見られました。

岩田 会場でご参加の方から、何か質問はありますか？

フロア メレキ先生に質問があります。よろしいでしょうか。現在トルコで読まれているマンガの、トルコの若者への影響についてお伺いしたいのですが、メレキ先生はどうお考えでしょうか。

メレキ 私は学生寄りに考えていて、いい影響の方が多いと思っています。どういうことかという、10代の若者にとってマンガは想像力をもっと豊かにするものだと感じます。日常では触れることのできないような内容とよく付き合っているとします。マンガだけでなくアニメを見ることによってもそうです。悪い影響というか少し心配になる点は、外に出たがらなくなること。アニメのファンになりすぎて、引きこもりそうな心配は少しあります。個人的にはそんな感じです。よろしいでしょうか。

岩田 ありがとうございました。オンライン参加の方からまだ少し質問があるのですが、これは発表者の方と後ほど共有します。質疑応答はこれで終りにいたします。

本日ご登壇いただいた先生方、プログラムに参加された皆様、最後まで聞いてくださった参加者のみなさま、ありがとうございました。今後も日本と日本語を学びながら、さらなる交流ができることを願っています。

それではメレキ先生から最後のご挨拶をお願いします。

メレキ 本日は皆さまありがとうございました。いろいろな国から参加していただき、熱心に聞いてくださってうれしく思っております。

私は2009年度の渥美財団の奨学生で、渥美財団にはそれ以来16年もお世話になっていいです。今日の集まりもそのおかげで実現できました。いいご縁をいただいて感謝しています。今後もぜひ交流を続けていきたいと思います。ありがとうございました。

登壇者
略歴

[発表者]

■ レベント・トクソズ／Levent TOKSÖZ

1980年、イスタンブール生まれ。チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学日本語教育学科卒業。修士&博士号（社会言語学）は広島大学にて取得。博士号取得後、同大学特任講師として勤務。2014年よりテキルダール・ナムク・ケマル大学東アジア言語文学科に所属。日本語に対して社会心理学的な立場から「感謝」「謝罪」「慰め」「嘘」のような言語行為について研究を行っている。

■ チェリッキ・メレキ／Melek ÇELİK

2009年度渥美奨学生。チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学日本語教育学部助教授。2011年11月筑波大学人文社会研究科文芸言語専攻の博士号（文学）取得。白百合女子大学、獨協大学、文京学院大学、早稲田大学非常勤講師、トルコ大使館文化部／ユヌス・エムレ・インスティトゥート講師、トルコ国立ネヴシエル・ハジユ・ベクタシユ・ヴェリ大学東洋言語東洋文学部助教授を経て2018年より現職。

■ アヤット・ホセイニ／Ayat HOSSEINI

名古屋大学、テヘラン大学、東京大学で学士から博士課程を修了。現在、テヘラン大学日本語・日本文学専攻の教員及び東アジア言語文学科の学科長を務める。専門は日本語学・日本文学で、2024年末までに著書10冊、学術論文40編を発表し、23件の修士論文を指導。研究・教育活動の一環として、日本語・日本文化に関する学術的取り組みに従事。2022年、日本外務大臣表彰を受賞。

■ ミヤ・ドゥイ・ロスティカ／Mya Dwi ROSTIKA

2010年度渥美奨学生。国土館大学大学院政治学研究科より博士（政治学）を取得。現在、大東文化大学国際関係学部講師。専門はインドネシア地域研究で、特に女性英雄カルティニの政治的役割を研究。大学で「多文化共生」を担当しており、日本のインドネシア人コミュニティにも関心を持ち、副次的な研究として取り組んでいる。

■ アキバリ・フリーエ／Hourieh AKBARI

イラン出身。テヘラン大学大学院日本語教育専攻修士課程修了。千葉大学博士後期課程修了（2018年博士号取得）。現在、神田外語大学国際コミュニケーション学科専任講師、千葉大学国際教養学部非常勤講師。2017年度渥美奨学生。日本在住の外国人や難民の言語環境および言語問題について、社会学・言語学の視点から研究。多文化共生社会、異文化理解、コミュニケーションに関する研究・教育活動に従事。

[討論者・司会]

■ トルガ・オズシェン／Tolga ÖZŞEN

トルコ・チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学（COMU）日本語教育学科の教授であり、熊本大学のリエゾン教授も務める。熊本大学で社会学の修士号および博士号を取得。研究分野は、戦後日本の社会変動、日本の教育システム、日本のイメージ研究。近年は、生成AIの発展に伴い、日本語・日本学教育における学問的誠実性の観点からの諸課題にも取り組んでいる。学問以外では、20年間にわたり剣道を実践している。

■ 孫建軍／Jianjun SUN

国際基督教大学Ph.D。現在は北京大学外国語学院日本語文化学科准教授。第4回中国翻訳専攻（専門士）大学院教育指導委員会メンバー。2002年度渥美奨学生・SGRA 研究員、南京大学アジア研究センター客員研究員。専攻は近代日中語彙交流史。近年は日中翻訳史、留学史に関心を広げている。著書1部（『近代日本語の起源 ―幕末明治初期につくられた新漢語』早稲田大学出版部）、訳書1部、日本語教科書数部。論文多数。

■ 市村美雪／Miyuki ICHIMURA

日本、中国、ラオス、スリランカで日本語教育に携わり、2005年9月よりトルコ国立チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学（COMU）日本語教育学科講師となる。2007年9月より同学科予備教育課程コーディネーターを務めている。2021年COMU大学院日本語教育修士課程入学、2023年修了。趣味は和菓子を作ることとトルコのドラマを見ること。

■ ショリナ ダリヤグル／Shorina DARIYAGUL

筑波大学（人文社会系・国際日本研究学位プログラム）研究員、非常勤講師。研究分野は日本語教育、言語文化教育。カザフスタン出身。2018年度渥美奨学生。世界の日本語教育は静的な構造ではなく、様々なあり方が存在し、相互的に多層し合う現象から成り立っているという立場に立ち、日本語学習者及び日本語教師の主体性を重視し、日本語教育のダイバーシティーを探究している。

■ ゲンチェル・バルオール・ゼイネップ

／Zeynep GENÇER BALOĞLU

パムッカレ大学外国語高等学校准教授。2009年に岡山大学大学院比較社会文化科学研究科で修士号、2016年にトルコのパムッカレ大学社会科学部で博士号を取得。近年チュルク諸語と日本語の比較研究と共に世界初の土日辞典である『メジウムアイ・ルガット』という作品を研究対象としている。また、夏目漱石の『硝子戸』と『夢十夜』のトルコ語翻訳も手掛けている。

■ チャクル・ムラット／Murat ÇAKIR

チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学日本語学科と同大学修士課程を修了。その後日本に留学し、筑波大学博士課程単位取得修了。現在、関西外国語大学英語国際学部准教授。2014年度渥美奨学生。専門は、教育学、教育経営学・学校経営。トルコにおいて学校に通えていない子どものための学習漫画による防災教育が子どもに及ぼすメカニズムの解明について検討。

■ 岩田和馬／Kazuma IWATA

東京外国語大学外国語学部西南アジア課程トルコ語学科卒業。同大学大学院総合国際学研究科にて修士号取得・博士後期課程在学。2020-2023年にトルコ、ボアジチ大学客員研究員としてイスタンブールへ留学。2024年度渥美奨学生。専門は18世紀イスタンブールの都市社会史。

■ シェッターディ アキル／Aqil CHEDDADI

慶應義塾大学総合政策学部訪問講師。モロッコ国立建築学校を卒業後に来日し、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科の環境デザイン・ガバナンス博士課程を修了。博士（政策・メディア）。2022年度渥美奨学生。

あとがきにかえて

チェリッキ・メレキ

チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学 (COMU)

2025年5月2日（金）、日本からかなり離れたトルコ西部のトロイ遺跡のあるチャナッカレ市で、第76回 SGRA フォーラム「中近東・東南アジアからみる日本と暮らす日本：それぞれの視点で考える」を開催した。

会場はチャナッカレ大学教育学部。日本語教育学科の学生およそ200人のトルコの若者たちにとっては日本や中国、インドネシア、カザフスタン、イラン、モロッコからこんなに多くの日本研究者が「現れた！」ことに居ても立っても居られない緊張感があった。2日前に日本文化室で交流会を開催したので、一部の学生はトルコ料理を食べながら、訪れてきた先生方と言葉を交わす機会もあった。学生たちが日本語でこれだけ多くの国の先生方と同じ空間で話せるチャンスは、学科30年の歴史で初めてだ。孫建軍先生（北京大学）の周りに集まった学生は、中国の日本語学科に留学できるか質問し、「中国人とも日本語で話せる」という自慢気な顔が新鮮だった。翻訳好きで哲学青年の3年生たちは、オスマントルコ史が専門の岩田和馬先生（東京外国語大学）と日本語で話したり、トルコ語で話したりと、授業では見られない達成感が見られた。

交流会のおかげで親しみも生まれ、学生たちはフォーラムが開始するや否や、目を大きく開けて熱心に聞き始めた。何よりも中近東のどこかで、「日本語仲間」が本当に多くいることが確認できたことが大きかったようだ。

第1部が始まるとレベント・トクソズ先生（NKU大学）が、「トルコに於ける日本語教育と学習者の最初の混乱：カタカナ」という題目で、トルコの若者がカタカナ、特に外来語に対して抱く距離感を取り上げた。中近東の若者は漢字が好きなのだ。漢詩でも書きたいのかなと微笑みながら、学生時代に同じ気持ちを抱いたことを思い出した。

次に私が「トルコの若者のアニメとマンガ関心：現実逃避、別世界とアイデンティティー」について話した。トルコの若者にとっての日本のアニメやマンガはもはやロラン・バルトの「表象の帝国」ではなく、「想像の帝国」として中近東的な摩擦から逃避できる新たな場であることを主張した。

3人目の登壇者はイランのアヤット・ホセイニ先生（テヘラン大学）で、「イランの若者と日本語・日本文化：メディア、教育、就職、そして未来展望」だった。イラン人には日本語が使える仕事をもっと必要だということは明らかだった。すぐ隣の国の同じ「日本語仲間」の業績と活動を意識していなかった反省が浮上してきた。イランの日本語仲間は、イラン的ともいべき美術と芸術への関心が強く、日本語学科では新見南吉の『手袋を買いに』を上演していることや、

チャナッカレ大学と同じ日本語教育修士課程があることを初めて知った。

第2部では日本社会で生活する外国人を取り上げた。中近東では日常生活が太古より多人種、多文化、多言語的、多宗教的である。それに対して、日本で暮らすインドネシアと中近東のイスラム文化圏出身者は生活の中で自分の位置づけを考え、最近は自文化へUターンしようとしていることが議論された。アキバリ・フーリエ先生（神田外国語大学）は「在日の中東出身者における日本語習得過程の変容と影響要因に関する考察」の中で、特にイラン人コミュニティの日本語学習は持続性が欠如していると指摘した。次にミヤ・ロスティカ先生（大東文化大学）が「在日インドネシアコミュニティと多文化共生：イスラム教育を中心に」と題した発表で、彼らが抱く非イスラム文化圏での育児と親が懸念する宗教教育問題に焦点を当てた。多文化共生は、受け入れ側との相互の努力が欠かせないことを感じた。

初めてトルコで開催したSGRAフォーラムの議論の内容は多様だったが、会場に集まった中近東と東南アジア出身の日本研究者と、トルコの大学生たちは「日本と日本語」という一つの価値観を共有しているのではないかと感じた。「アジア人」というアイデンティティーは私が日常的に思っている以上に大きい共同体である。「西洋文化は理性、東洋文化は感性と結びつく」と良く言われる。今回のフォーラムに理性が欠如していたわけではないが、参加者ひとりひとりの顔に「一期一会」を大事に思う気持ちが現れていることを確認できたことが、私にとって最も大きな「リアル（現実）」だった。それは「アジア的な世界市民もいる」という一つの安心感だった。

この安心感は、宿泊施設の駐車場でバスから降りてきた前・渥美財団事務局長の角田英一さんに「おお、メレキさん、久しぶり！」と声を掛けられた時の嬉しさと同一かもしれない。

（チェリッキ・メレキ「第76回SGRAフォーラム『中近東・東南アジアからみる日本と暮らす日本：それぞれの視点で考える』報告」より転載）



SGRA レポート バックナンバーのご案内

- SGRA レポート01 設立記念講演録 「21世紀の日本とアジア」 船橋洋一 2001. 1. 30 発行
- SGRA レポート02 CISV 国際シンポジウム講演録 「グローバル化への挑戦：多様性の中に調和を求めて」
今西淳子、高 偉俊、F. マキト、金 雄熙、李 來賛 2001. 1. 15 発行
- SGRA レポート03 渥美奨学生の集い講演録 「技術の創造」 畑村洋太郎 2001. 3. 15 発行
- SGRA レポート04 第1 回フォーラム講演録 「地球市民の皆さんへ」 関 啓子、L. ビッヒラー、高 熙卓 2001. 5. 10 発行
- SGRA レポート05 第2 回フォーラム講演録 「グローバル化のなかの新しい東アジア：経済協力をどう考えるべきか」
平川 均、F. マキト、李 鋼哲 2001. 5. 10 発行
- SGRA レポート06 投稿 「今日の留学」「はじめの一步」 工藤正司 今西淳子 2001. 8. 30 発行
- SGRA レポート07 第3 回フォーラム講演録 「共生時代のエネルギーを考える：ライフスタイルからの工夫」
木村建一、D. バート、高 偉俊 2001. 10. 10 発行
- SGRA レポート08 第4 回フォーラム講演録 「IT 教育革命：IT は教育をどう変えるか」
白井建彦、西野篤夫、V. コストブ、F. マキト、J. スリスマンティオ、蔣 恵玲、楊 接期、
李 來賛、斎藤信男 2002. 1. 20 発行
- SGRA レポート09 第5 回フォーラム講演録 「グローバル化と民族主義：対話と共生をキーワードに」
ペマ・ギャルポ、林 泉忠 2002. 2. 28 発行
- SGRA レポート10 第6 回フォーラム講演録 「日本とイスラーム：文明間の対話のために」
S. ギュレチ、板垣雄三 2002. 6. 15 発行
- SGRA レポート11 投稿 「中国はなぜWTO に加盟したのか」 金香海 2002. 7. 8 発行
- SGRA レポート12 第7 回フォーラム講演録 「地球環境診断：地球の砂漠化を考える」
建石隆太郎、B. プレンサイン 2002. 10. 25 発行
- SGRA レポート13 投稿 「経済特区：フィリピンの視点から」 F. マキト 2002. 12. 12 発行
- SGRA レポート14 第8 回フォーラム講演録 「グローバル化の中の新しい東アジア」 + 宮澤喜一元総理大臣をお迎えして
フリーディスカッション
平川 均、李 鎮奎、ガト・アルヤ・プートゥラ、孟 健軍、B. ヴィリエガス 日本語版2003. 1. 31 発行、
韓国語版2003. 3. 31 発行、中国語版2003. 5. 30 発行、英語版2003. 3. 6 発行
- SGRA レポート15 投稿 「中国における行政訴訟—請求と処理状況に対する考察—」 呉東鎬 2003. 1. 31 発行
- SGRA レポート16 第9 回フォーラム講演録 「情報化と教育」 苑 復傑、遊間和子 2003. 5. 30 発行

- SGRA レポート 17 第10回フォーラム講演録 「21世紀の世界安全保障と東アジア」
白石 隆、南 基正、李 恩民、村田晃嗣 日本語版2003. 3. 30 発行、英語版2003. 6. 6 発行
- SGRA レポート 18 第11回フォーラム講演録 「地球市民研究：国境を越える取り組み」 高橋 甫、貫戸朋子 2003. 8. 30 発行
- SGRA レポート 19 投稿 「海軍の誕生と近代日本－幕末期海軍建設の再検討と『海軍革命』の仮説」 朴 栄濬
2003. 12. 4 発行
- SGRA レポート 20 第12回フォーラム講演録 「環境問題と国際協力：C O P 3 の目標は実現可能か」
外岡豊、李海峰、鄭成春、高偉俊 2004. 3. 10 発行
- SGRA レポート 21 日韓アジア未来フォーラム 「アジア共同体構築に向けての日本及び韓国の役割について」2004. 6. 30 発行
- SGRA レポート 22 渥美奨学生の集い講演録 「民族紛争－どうして起こるのか どう解決するか」 明石康 2004. 4. 20 発行
- SGRA レポート 23 第13回フォーラム講演録 「日本は外国人をどう受け入れるべきか」
宮島喬、イコ・プラムティオノ 2004. 2. 25 発行
- SGRA レポート 24 投稿 「1945年のモンゴル人民共和国の中国に対する援助：その評価の歴史」 フスレ 2004. 10. 25 発行
- SGRA レポート 25 第14回フォーラム講演録 「国境を越えるE-Learning」
斎藤信男、福田収一、渡辺吉裕、F. マキト、金 雄熙 2005. 3. 31 発行
- SGRA レポート 26 第15回フォーラム講演録 「この夏、東京の電気は大丈夫？」 中上英俊、高 偉俊 2005. 1. 24 発行
- SGRA レポート 27 第16回フォーラム講演録 「東アジア軍事同盟の過去・現在・未来」
竹田いさみ、R. エルドリッチ、朴 栄濬、渡辺 剛、伊藤裕子 2005. 7. 30 発行
- SGRA レポート 28 第17回フォーラム講演録 「日本は外国人をどう受け入れるべきか- 地球市民の義務教育-」
宮島 喬、ヤマグチ・アナ・エリーザ、朴 校熙、小林宏美 2005. 7. 30 発行
- SGRA レポート 29 第18回フォーラム・第4回日韓アジア未来フォーラム講演録 「韓流・日流：東アジア地域協力における
ソフトパワー」 李 鎮奎、林 夏生、金 智龍、道上尚史、木宮正史、李 元徳、金 雄熙 2005. 5. 20 発行
- SGRA レポート 30 第19回フォーラム講演録 「東アジア文化再考－自由と市民社会をキーワードに－」
宮崎法子、東島 誠 2005. 12. 20 発行
- SGRA レポート 31 第20回フォーラム講演録 「東アジアの経済統合：雁はまだ飛んでいるか」
平川 均、渡辺利夫、トラン・ヴァン・トウ、範 建亭、白 寅秀、エンクバヤル・シャグダル、F. マキト
2006. 2. 20 発行
- SGRA レポート 32 第21回フォーラム講演録 「日本人は外国人をどう受け入れるべきか－留学生－」
横田雅弘、白石勝己、鄭仁豪、カンピラバプ・スネート、王雪萍、黒田一雄、大塚晶、徐向東、
角田英一 2006. 4. 10 発行

- SGRA レポート 33 第22 回フォーラム講演録 「戦後和解プロセスの研究」 小菅信子、李 恩民 2006. 7. 10 発行
- SGRA レポート 34 第23 回フォーラム講演録 「日本人と宗教：宗教って何なの？」
島蘭 進、ノルマン・ヘイヴンズ、ランジャナ・ムコパディヤヤー、ミラ・ゾンターク、
セリム・ユジェル・ギュレチ 2006. 11. 10 発行
- SGRA レポート 35 第24 回フォーラム講演録 「ごみ処理と国境を越える資源循環～私が分別したごみはどこへ行くの？～」
鈴木進一、間宮 尚、李 海峰、中西 徹、外岡 豊 2007. 3. 20 発行
- SGRA レポート 36 第25 回フォーラム講演録 「ITは教育を強化できるか」
高橋富士信、藤谷哲、楊接期、江蘇蘇 2007. 4. 20 発行
- SGRA レポート 37 第1 回チャイナ・フォーラム in 北京講演録 「パネルディスカッション『若者の未来と日本語』」
池崎美代子、武田春仁、張 潤北、徐 向東、孫 建軍、朴 貞姫 2007. 6. 10 発行
- SGRA レポート 38 第6 回日韓フォーラム in 葉山講演録 「親日・反日・克日：多様化する韓国の対日観」
金 範洙、趙 寛子、玄 大松、小針 進、南 基正 2007. 8. 31 発行
- SGRA レポート 39 第26 回フォーラム講演録 「東アジアにおける日本思想史～私たちの出会いと将来～」
黒住 真、韓 東育、趙 寛子、林 少陽、孫 軍悦 2007. 11. 30 発行
- SGRA レポート 40 第27 回フォーラム講演録 「アジアにおける外来種問題～ひとの生活との関わりを考える～」
多紀保彦、加納光樹、プラチャー・ムシカシントーン、今西淳子 2008. 5. 30 発行
- SGRA レポート 41 第28 回フォーラム講演録 「いのちの尊厳と宗教の役割」
島蘭進、秋葉悦子、井上ウイマラ、大谷いづみ、ランジャナ・ムコパディヤヤー 2008. 3. 15 発行
- SGRA レポート 42 第2 回チャイナ・フォーラム in 北京&新疆講演録 「黄土高原緑化協力の15 年—無理解と失敗から
相互理解と信頼へ—」 高見邦雄 日本語版、中国語版 2008. 1. 30 発行
- SGRA レポート 43 渥美奨学生の集い講演録 「鹿島守之助とパン・アジア主義」 平川均 2008. 3. 1 発行
- SGRA レポート 44 第29 回フォーラム講演録「広告と社会の複雑な関係」 関沢 英彦、徐 向東、オリガ・ホメンコ
2008. 6. 25 発行
- SGRA レポート 45 第30 回フォーラム講演録 「教育における『負け組』をどう考えるか～
日本、中国、シンガポール～」 佐藤香、山口真美、シム・チュン・キャット 2008. 9. 20 発行
- SGRA レポート 46 第31 回フォーラム講演録 「水田から油田へ：日本のエネルギー供給、食糧安全と地域の活性化」
東城清秀、田村啓二、外岡 豊 2009. 1. 10 発行
- SGRA レポート 47 第32 回フォーラム講演録 「オリンピックと東アジアの平和繁栄」
清水 諭、池田慎太郎、朴 榮濬、劉傑、南 基正 2008. 8. 8 発行
- SGRA レポート 48 第3 回チャイナ・フォーラム in 延辺&北京講演録 「一燈やがて万燈となる如く—
アジアの留学生と生活を共にした協会の50 年」 工藤正司 日本語版、中国語版 2009. 4. 15 発行

- SGRA レポート 49 第33回フォーラム講演録 「東アジアの経済統合が格差を縮めるか」
東 茂樹、平川 均、ド・マン・ホーン、フェルディナンド・C・マキト 2009. 6. 30 発行
- SGRA レポート 50 第8 回日韓アジア未来フォーラム講演録 「日韓の東アジア地域構想と中国観」
平川 均、孫 洌、川島 真、金 湘培、李 鋼哲 日本語版、韓国語 Web 版 2009. 9. 25 発行
- SGRA レポート 51 第35 回フォーラム講演録 「テレビゲームが子どもの成長に与える影響を考える」
大多和直樹、佐々木 敏、渋谷明子、ユ・ティ・ルイン、江 蘇蘇 2009. 11. 15 発行
- SGRA レポート 52 第36 回フォーラム講演録 「東アジアの市民社会と 21 世紀の課題」
宮島 喬、都築 勉、高 熙卓、中西 徹、林 泉忠、ブ・ティ・ミン・チイ、
劉 傑、孫 軍悦 2010. 3. 25 発行
- SGRA レポート 53 第4 回チャイナ・フォーラム in 北京&上海講演録 「世界的課題に向けていま若者ができること〜
TABLE FOR TWO 〜」近藤正晃ジェームス 2010. 4. 30 発行
- SGRA レポート 54 第37 回フォーラム講演録 「エリート教育は国に『希望』をもたらすか：
東アジアのエリート高校教育の現状と課題」玄田有史 シム・チュンキャット
金 範洙 張 健 2010. 5. 10 発行
- SGRA レポート 55 第38 回フォーラム講演録 「Better City, Better Life 〜東アジアにおける都市・
建築のエネルギー事情とライフスタイル〜」木村建一、高 偉俊、
Mochamad Donny Koerniawan、Max Maquito、Pham Van Quan、
葉 文昌、Supreedee Rittironk、郭 榮珠、王 劍宏、福田展淳 2010. 12. 15 発行
- SGRA レポート 56 第5 回チャイナ・フォーラム in 北京&フフホト講演録 「中国の環境問題と日中民間協力」
第一部（北京）：「北京の水問題を中心に」高見邦雄、汪 敏、張 昌玉
第二部（フフホト）：「地下資源開発を中心に」高見邦雄、オンドロナ、ブレンサイン
2011. 5. 10 発行
- SGRA レポート 57 第39 回フォーラム講演録 「ポスト社会主義時代における宗教の復興」井上まどか、
ティムール・ダダバエフ、ゾンターク・ミラ、エリック・シッケタンツ、島蘭 進、陳 継東
2011. 12. 30 発行
- SGRA レポート 58 投稿 「鹿島守之助とパン・アジア論への一試論」平川 均 2011. 2. 15 発行
- SGRA レポート 59 第10 回日韓アジア未来フォーラム講演録「1300 年前の東アジア地域交流」
朴 亨國、金 尚泰、胡 潔、李 成制、陸 載和、清水重敦、林 慶澤 2012. 1. 10 発行
- SGRA レポート 60 第40 回フォーラム講演録「東アジアの少子高齢化問題と福祉」
田多英範、李 蓮花、羅 仁淑、平川 均、シム・チュンキャット、F・マキト 2011. 11. 30 発行
- SGRA レポート 61 第41 回SGRA フォーラム講演録「東アジア共同体の現状と展望」恒川恵市、黒柳米司、朴 榮濬、
劉 傑、林 泉忠、ブレンサイン、李 成日、南 基正、平川 均 2012. 6. 18 発行
- SGRA レポート 62 第6 回チャイナ・フォーラム in 北京&フフホト講演録
「Sound Economy 〜私がミナマタから学んだこと〜」 柳田耕一
「内モンゴル草原の生態系：鉱山採掘がもたらしている生態系破壊と環境汚染問題」郭 偉
2012. 6. 15 発行

- SGRA レポート 64 第43回SGRAフォーラム in 蓼科 講演録「東アジア軍事同盟の課題と展望」
朴 榮濬、渡辺 剛、伊藤裕子、南 基正、林 泉忠、竹田いさみ 2012. 11. 20 発行
- SGRA レポート 65 第44回SGRAフォーラム in 蓼科 講演録「21世紀型学力を育むフューチャースクールの戦略と課題」
赤堀侃司、影戸誠、曹圭福、シム・チュンキャット、石澤紀雄 2013. 2. 1 発行
- SGRA レポート 66 渥美奨学生の集い講演録「日英戦後和解（1994-1998 年）」（日本語・英語・中国語）沼田貞昭
2013. 10. 20 発行
- SGRA レポート 67 第12回日韓アジア未来フォーラム講演録「アジア太平洋時代における東アジア新秩序の模索」
平川 均、加茂具樹、金 雄熙、木宮正史、李 元徳、金 敬黙 2014. 2. 25 発行
- SGRA レポート 68 第7回SGRAチャイナ・フォーラム in 北京講演録「ボランティア・志願者論」
（日本語・中国語・英語）宮崎幸雄 2014. 5. 15 発行
- SGRA レポート 69 第45回SGRAフォーラム講演録「紛争の海から平和の海へー東アジア海洋秩序の現状と展望ー」
村瀬信也、南 基正、李 成日、林 泉忠、福原裕二、朴 榮濬 2014. 10. 20 発行
- SGRA レポート 70 第46回SGRAフォーラム講演録「インクルーシブ教育：子どもの多様なニーズにどう応えるか」
荒川 智、上原芳枝、ヴィラーク ヴィクトル、中村ノーマン、崔 佳英 2015. 4. 20 発行
- SGRA レポート 71 第47回SGRAフォーラム講演録「科学技術とリスク社会ー福島第一原発事故から考える科学技術
と倫理ー」崔 勝媛、島藺 進、平川秀幸 2015. 5. 25 発行
- SGRA レポート 72 第8回チャイナ・フォーラム講演録「近代日本美術史と近代中国」
佐藤道信、木田拓也 2015. 10. 20 発行
- SGRA レポート 73 第14回日韓アジア未来フォーラム、第48回SGRAフォーラム講演録「アジア経済のダイナミズムー
物流を中心に」李 鎮奎、金 雄熙、榎原英資、安 秉民、ドマン ホーン、李 銅哲 2015. 11. 10 発行
- SGRA レポート 74 第49回SGRAフォーラム講演録：円卓会議「日本研究の新しいパラダイムを求めて」
劉 傑、平野健一郎、南 基正 他15名 2016. 6. 20 発行
- SGRA レポート 75 第50回SGRAフォーラム in 北九州講演録「青空、水、くらしー環境と女性と未来に向けて」
神崎智子、斉藤淳子、李 允淑、小林直子、田村慶子 2016. 6. 27 発行
- SGRA レポート 76 第9回SGRAチャイナ・フォーラム in フフホト&北京講演録「日中200年ー文化史からの再検討」
劉 建輝 2020. 6. 18 発行
- SGRA レポート 77 第15回日韓アジア未来フォーラム講演録「これからの日韓の国際開発協力ー共進化アーキテクチャ
の模索」孫赫相、深川由紀子、平川均、フェルディナンド・C・マキト 2016. 11. 10 発行
- SGRA レポート 78 第51回SGRAフォーラム講演録「今、再び平和についてー平和のための東アジア知識人連帯を考え
るー」南基正、木宮正史、朴榮濬、宋均宮、林泉忠、都築勉 2017. 3. 27 発行

- SGRA レポート 79 第52回 SGRA フォーラム講演録「日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性(1)」
劉傑、趙珖、葛兆光、三谷博、八百啓介、橋本雄、松田麻美子、徐静波、鄭淳一、金キョンテ
2017. 6. 9 発行
- SGRA レポート 80 第16回 日韓アジア未来フォーラム講演録「日中韓の国際開発協力—新たなアジア型モデルの模索—」
金雄熙、李恩民、孫赫相、李鋼哲 2017. 5. 16 発行
- SGRA レポート 81 第56回 SGRA フォーラム講演録「人を幸せにするロボット—人とロボットの共生社会をめざして第
2 回—」稲葉雅幸、李周浩、文景楠、瀬戸文美 2017. 11. 20 発行
- SGRA レポート 82 第57回 SGRA フォーラム講演録「第2 回 日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性—蒙
古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化」葛兆光、四日市康博、チョグト、橋本雄、エルデニ
バートル、向正樹、孫衛国、金甫枕、李命美、ツェレンドルジ、趙阮、張佳 2018. 5. 10 発行
- SGRA レポート 83 第58回 SGRA フォーラム講演録「アジアを結ぶ?『一带一路』の地政学」朱建栄、李彦銘、朴榮
濬、古賀慶、朴准儀 2018. 11. 16 発行
- SGRA レポート 84 第11回 SGRA チャイナフォーラム講演録「東アジアからみた中国美術史学」塚本磨充、呉孟晋
2019. 5. 17 発行
- SGRA レポート 85 第17回 日韓アジア未来フォーラム講演録「北朝鮮開発協力：各アクターから現状と今後を聞く」
孫赫相、朱建栄、文昊鍊 2019. 11. 22 発行
- SGRA レポート 86 第59回 SGRA フォーラム講演録「第3 回 日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性：17世
紀東アジアの国際関係—戦乱から安定へ—」三谷博、劉傑、趙珖、崔永昌、鄭潔西、荒木和憲、許
泰玖、鈴木開、祁美琴、牧原成征、崔姪姫、趙軼峰 2019. 9. 20 発行
- SGRA レポート 87 第61回 SGRA フォーラム講演録「日本の高等教育のグローバル化!？」
沈雨香、吉田文、シン・ジョン Chol、関沢和泉、ムラット・チャクル、金範洙 2019. 3. 26 発行
- SGRA レポート 88 第12回 SGRA チャイナ・フォーラム講演録「日中映画交流の可能性」
刈間文俊、王衆一 2020. 9. 25 発行
- SGRA レポート 89 第62回 SGRA フォーラム講演録「再生可能エネルギーが世界を変える時…? —不都合な真実を超えて」
ルウェリン・ヒューズ、ハンス＝ヨゼフ・フェル、朴准儀、高偉俊、葉文昌、佐藤健太、近藤恵
2019. 11. 1 発行
- SGRA レポート 90 第63回 SGRA フォーラム講演録「第4 回 日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性：『東
アジア』の誕生—19世紀における国際秩序の転換—」三谷博、大久保健晴、韓承勳、孫青、大川
真、南基玄、郭衛東、塩出浩之、韓成敏、秦方 2020. 11. 20 発行
- SGRA レポート 91 第13回 SGRA-V カフェ講演録「ポスト・コロナ時代の東アジア」林 泉忠 2020. 11. 20 発行
- SGRA レポート 92 第13回 SGRA チャイナ・フォーラム講演録「国際日本学としてのアニメ研究」大塚英志、秦 剛、
古市雅子、陳 龔 2021. 6. 18 発行

- SGRA レポート 93 第14回SGRA チャイナ・フォーラム講演録「東西思想の接触圏としての日本近代美術史再考」稲賀繁美、劉 曉峰、塚本麿充、王 中忱、林 少陽 2021. 6. 18 発行
- SGRA レポート 94 第65回SGRA-V フォーラム講演録「第5回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性：19世紀東アジアにおける感染症の流行と社会的対応」朴 漢珉、市川智生、余 新忠 2021. 10. 05 発行
- SGRA レポート 95 第19回日韓アジア未来フォーラム講演録「岐路に立つ日韓関係：これからどうすればいいか」小此木 政夫、李 元徳、沈 揆先、伊集院 敦、金 志英、小針 進、朴 榮濬、西野 純也 2021. 11. 17 発行
- SGRA レポート 96 第66回SGRA フォーラム講演録「第6回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性 人の移動と境界・権力・民族」塩出浩之、趙 阮、張 佳、榎本 渉、韓 成敏、秦 方、大久保健晴 2022. 6. 9 発行
- SGRA レポート 97 第67回SGRA フォーラム講演録「『誰一人取り残さない』如何にパンデミックを乗り越えSDGs実現に向かうか—世界各地からの現状報告—」佐渡友 哲、フェルディナンド・C・マキト、杜 世鑫、ダルウィッシュ ホサム、李 鋼哲、モハメド・オマル・アブディン 2022. 2. 10 発行
- SGRA レポート 98 第15回SGRA チャイナ・フォーラム講演録「アジアはいかに作られ、モダンはいかなる変化を生んだのか？—空間アジアの形成と生活世界の近代・現代—」山室信一 2022. 6. 9 発行
- SGRA レポート 99 第68回SGRA フォーラム講演録「夢・希望・嘘—メディアとジェンダー・セクシュアリティの関係性を探る—」ハンプルトン・アレクサンドラ、バラニャク平田ズザンナ、于寧、洪ユン伸 2022. 11. 1 発行
- SGRA レポート 100 第20回日韓アジア未来フォーラム講演録「進撃のKカルチャー——新韓流現象とその影響力」小針 進、韓 準、チュ・スワン・ザオ 2022. 11. 16 発行
- SGRA レポート 101 第69回SGRA フォーラム講演録「第7回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性：『歴史大衆化』と東アジアの歴史学」韓 成敏 2023. 3. 22 発行
- SGRA レポート 102 第16回SGRA チャイナ・フォーラム講演録「モダンの衝撃とアジアの百年—異中同あり、通底・反転するグローバリゼーション—」山室信一 2023. 6. 14 発行
- SGRA レポート 103 第70回SGRA フォーラム講演録「木造建築文化財の修復・保存について考える」竹口泰生、姜 璿慧、永 昕群、アレハンドロ・マルティネス、塩原フローニ・フリデリケ 2023. 11. 10 発行
- SGRA レポート 104 第21回日韓アジア未来フォーラム講演録「新たな脅威（エマージングリスク）・新たな安全保障（エマージングセキュリティ）—これからの政策への挑戦—」金 湘培、鈴木一人 2023. 11. 15 発行
- SGRA レポート 105 第71回SGRA フォーラム講演録「20世紀前半、北東アジアに現れた『緑のウクライナ』という特別な空間」オリガ・ホメンコ、塚瀬 進、ナヒヤ、グロリア・ヤン ユー、マグダレナ・コウオジェイ 2023. 10. 30 発行
- SGRA レポート 106 第72回SGRA フォーラム講演録「第8回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性：20世紀の戦争・植民地支配と和解はどのように語られてきたのか—教育・メディア・研究—」金 泰雄、唐 小兵、塩出浩之、江 沛、福岡良明、李 基勳、安岡健一、梁 知恵、陳 紅民 2024. 4. 12 発行

- SGRA レポート 107 第17回SGRA チャイナ・フォーラム講演録「東南アジアにおける近代〈美術〉の誕生」後小路雅弘
2024.6.13 発行
- SGRA レポート 108 第22回日韓アジア未来フォーラム・2024現代日本学会春季国際学術大会講演録「ジェットコースター
の日韓関係——何が正常で何が憂鬱なのか」西野純也、李 昌玖、小針 進 2024.11.14 発行
- SGRA レポート 109 第74回SGRA フォーラム講演録「第9回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性：東ア
ジアの「国史」と東南アジア」楊 奎松、タンシンマンコン・パッタジット、吉田ますみ、尹 大栄、
高 艶傑 2025. 6. 20 発行
- SGRA レポート 110 第20回・22回SGRA カフェ・第73回SGRA フォーラム講演録「パレスチナを知ろう」ハディ ハー
ニ、ウィアム・ヌマン、溝川貴己、山本 薫 2025. 6. 20 発行
- SGRA レポート 111 第11回日台アジア未来フォーラム／東アジア日本研究者協議会第8回国際学術大会内講演録「疫病と
東アジアの医学知識——知の連鎖と比較」李 尚仁、朴 漢珉、松村紀明、町 泉寿郎 2025. 6. 20 発行
- SGRA レポート 112 第18回SGRA チャイナ・フォーラム講演録「アジア近代美術における〈西洋〉の受容」後小路雅弘
2025. 11. 16 発行
- SGRA レポート 113 第75回SGRA フォーラム／第45回持続的な共有型成長セミナー講演録「東アジア地域市民の対話：
国境を超える地方自治体・地域コミュニティ連携構想（LLABS）の可能性を探る」フェルディナン
ド C. マキト、佐藤考一、李 鋼哲、南 基正、林 泉忠 2025. 11. 19 発行

■ レポートご希望の方は、SGRA 事務局（Tel：03-3943-7612 Email：sgra@aisf.or.jp）へご連絡ください。

SGRA レポート No. 0114

第76回SGRAフォーラム

中近東・東南アジアからみる日本と暮らす日本：
それぞれの視点で考える

編集・発行 (公財) 渥美国際交流財団関口グローバル研究会 (SGRA)
〒112-0014 東京都文京区関口3-5-8
Tel: 03-3943-7612 Fax: 03-3943-1512
SGRA ホームページ: <http://www.aisf.or.jp/sgra/>
電子メール: sgra@aisf.or.jp

発行日 2025年11月21日
発行責任者 今西淳子
印刷 (株) 平河工業社

©関口グローバル研究会 禁無断転載 本誌記事のお尋ねならびに引用の場合はご連絡ください。
©Sekiguchi Global Research Association Copying is Prohibited. For inquiries or quotes, please contact us.

